東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅰ

２００２．３

掛川市教育委員会

東名掛川I･C周辺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅰ

２００２．３

掛川市教育委員会

例　　言

１．本書は、静岡県掛川市杉谷、上張地内における東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

２．調査は、東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理組合の委託を受け掛川市教育委員会が実施した。発掘調査にかかる費用は、東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理組合が負担した。

３．調査にかかわる期間は以下の通りである。

発掘調査　1995年４月～2000年９月（確認調査25地点のうち11地点本調査）

整理作業　2001年４月～2003年３月（2002年３月に報告書Ⅰを刊行）

４．本報告書は、平成７年度に行った26地点の杉谷城と、平成11年度に行った11地点の茶屋辻遺跡の報告書である。2003年３月に刊行する報告書Ⅱに６地点の栗下古墳、14地点の京徳横穴群、18～22地点の茶屋辻古墳、23地点の茶屋辻横穴群、27地点の矢崎横穴Ｄ群を記載する。

５．現地調査、本書の執筆・編集は井村広巳が行った。附載については、加藤理文氏（織豊期城郭研究会）から原稿を戴いた。また、石器の実測・トレースは、松井一明氏（袋井市教育委員会）にお願いした。

６．調査にかかわる諸記録および出土遺物は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

１．挿図中の方位は、真北を示す。

２．挿図中の標高は、海抜を示す。

３．遺構の略号は以下のようにした。

ＳＰ：小穴　　ＳＸ：不明遺構　　ＳＹ：炭窯

目　　次

例　言
凡　例

第１章　調査経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査の方法 …… 2
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　杉 谷 城
　第１節　城に関する遺構
　　１．主　郭 …… 4
　　２．二ノ郭 …… 4
　　３．三ノ郭 …… 4
　　４．堀切１ …… 5
　　５．堀切２ …… 5
　　６．竪堀１ …… 5
　　７．竪堀２ …… 5
　第２節　H地点の遺構・遺物 …… 5
　第３節　その他の地点の遺構・遺物
　　１．集石遺構 …… 6
　　２．炭窯 …… 6
　　３．その他 …… 7
　第４節　小　　結 …… 7
第４章　茶屋辻遺跡 …… 9

附載　徳川家康による掛川城包囲網と杉谷城 …… 10

挿 図 目 次

第１図　掛川城攻めにおける徳川軍の城砦群位置図
第２図　杉谷城概要図
第３図　中村城山砦（大東町）概要図

実 測 目 次

第１図　東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺遺跡分布図
第２図　東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺調査地点位置図
第３図　杉谷城全体図
第４図　杉谷城縄張り図
第５図　主郭実測図
第６図　土塁、竪堀２土層断面図
第７図　二ノ郭、竪堀１、堀切１、２実測図
第８図　堀切２土層断面図
第９図　出土遺物実測図
第10図　Ｈ地区実測図
第11図　Ｈ地区土層断面図
第12図　ＳＸ01土層断面図、ＳＰ01実測図、Ｈ地区出土遺物実測図
第13図　集石１、２、３実測図
第14図　ＳＹ01、炭１実測図
第15図　茶屋辻遺跡ＳＸ01実測図
第16図　茶屋辻ＳＸ02実測図

写真図版目次

1　杉谷城遠景（南東から）
2　主郭・堀切１調査前（東から）
3　二ノ郭・堀切２調査前（東から）
4　完掘全景（垂直）
5　主郭・堀切１・二ノ郭完掘（東から）
6　土塁Ｃ－Ｃ’土層断面
7　堀切１・二ノ郭全景（南から）
8　主郭・堀切１全景（北から）
9　堀切２全景（西から）
10　堀切２近景（北から）
11　二ノ郭全景（北から）
12　集石１（北から）
13　集石３（北から）
14　主郭作業風景　　堀切２作業風景
15　Ｈ地区全景（北から）
16　茶屋辻遺跡ＳＸ01全景
17　ＳＸ02全景
18　出土遺物
19　出土遺物
20　出土遺物

堀切１、２完掘（北西から）
主郭・堀切１・二ノ郭調査前（東から）
確認調査終了後全景（東から）
完掘全景（南東から）
主郭完掘（南から）
土塁Ｂ－Ｂ’土層断面
堀切１Ｂ－Ｂ’土層断面
堀切１近景（南から）
堀切２近景（西から）
堀切２Ｅ－Ｅ’土層断面
竪堀２　土層断面
集石２（東から）
炭１（南から）
Ｈ地区作業風景
ＳＰ01（西から）
ＳＸ01　内部
ＳＸ02（西から）

第1章　調　査　経　過

第１節　調査に至る経緯

平成５年12月、東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理組合によって掛川市上張・杉谷地内の広さ61.5haに及ぶ土地区画整理事業計画が立てられ、掛川市教育委員会は埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会を受けた。『静岡県文化財地図Ⅱ』、『掛川市遺跡地図』と照合するとともに、平成６年２月22日、25日、５月31日に現地踏査を行った結果、周知の遺跡である地点と所在確認調査が必要な地点が存在することが明らかとなった。平成６年11月、埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、平成７年４月から１～６地点、26地点の遺跡所在確認調査を実施し、遺跡の所在が明らかになった場合、引き続き本調査を実施することとなった。その他の地点については、平成８年度以降、造成工事に先立ち順次確認調査、本調査を実施する運びとなった。また、発掘調査にかかる費用については、区画整理組合が負担することとし、現地調査が終了した後に、整理作業を実施、報告書を刊行して埋蔵文化財発掘事業のすべてを終了することを確認した。

第２節　調 査 の 経 過

平成６年12月12日、掛川市教育委員会は東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理組合より確認調査の依頼を受け、平成７年４月より発掘調査を開始することとなった。以下各地点の調査日時とその内容を下記の表に記す。

地点	遺跡名	所在地	調査日時	内容
1		掛川市上張798外	1995.４.18	１×30mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
2		掛川市上張796－１外	1995.４.17～４.20	１×22mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
3		掛川市上張789外	1995.４.21～４.30	１×24、1×10mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
4		掛川市上張784外	1995.４.21～４.30	108㎡試掘 遺構・遺物なし
5		掛川市上張708外	1995.４.20	１×12、1×20mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
6	栗下古墳	掛川市上張668外	1999.11.１～2000.１.27	木棺直葬墳を確認 本調査実施
7		掛川市杉谷683－１外	1996.４.22、４.23	１×7、1×14mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
8		掛川市杉谷683－１外	1996.４.22、４.23	１×6、1×13mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
9		掛川市杉谷676外	1996.11.15～11.19	１×26mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
10		掛川市杉谷670外	1996.11.15～11.19	１×10mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
11	茶屋辻遺跡	掛川市杉谷671－１外	1999.11.18～12.１	時期不明の遺構確認
12		掛川市杉谷671－１外	1996.11.15～11.19	１×14mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
13		掛川市上張77－１外	1996.11.19～1996.11.22	１×30mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
			2000.７.13～７.18	１×17、1×55mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
14	京徳横穴群	掛川市上張76外	1996.12.19～1997.１.20	１基の横穴を調査
			2000.７.13～2000.９.18	９基の横穴を調査

15		掛川市上張69－1外		緑地として保存されるため未調査
16		掛川市上張70－2外		緑地として保存されるため未調査
17		掛川市上張66－1外	1996.11.25～12．3	1×12mのトレンチ掘削 遺構・遺物なし
18	茶屋辻古墳	掛川市杉谷611外	1997.12.5～1998.4.29	2基の木棺直葬墳を調査
19				
20				
21				
22				
23	茶屋辻横穴群	掛川市杉谷612外	1997.12.5～1998.4.29	18基の横穴を調査
24		掛川市杉谷573外	1996．4．23～4．26	1×30､1×20mのトレンチ掘削 遺構･遺物なし
25		掛川市杉谷266－4	1996．4．23～4．26	1×15､1×7mのトレンチ掘削 遺構･遺物なし
26	杉谷城	掛川市杉谷552－2外	1995．4．26～1996．3．31	掛川城攻めの際に築かれた砦を調査
27	矢崎横穴D群	掛川市上張694外	1995.11.13～1996.1.24	3基の横穴を調査

第1表　東名掛川Ⅰ・C周辺土地区画整理地内埋蔵文化財調査一覧表

第3節　調 査 の 方 法

杉　谷　城

調査範囲の立木を伐採したのち、尾根上に幅1mのトレンチを設定し、地山の深さを確認した。そして尾根上の表土をすべて人手によって剥ぎ、遺構の検出、精査、実測、写真撮影を行った。H地区については、重機（バックホー）を用いて遺構確認面まで掘削した。確認した遺構は、堆積土が厚いものは、鍬や鋤簾を用いて掘削し、移植ゴテで細部を精査した。現地は、起伏が激しく、広大な面積であるため、遺構の平面実測、全体の地形測量は業者に委託し、ラジコンヘリコプターによる写真測量で図化した。遺構の土層断面図、H地区平面実測図は1/20の縮尺で、集石遺構は1/10の縮尺で人手により記録した。写真撮影には、6×7判（モノクロ）1台と35㎜判（モノクロ、リバーサル、カラー）3台を利用した。必要に応じてローリングタワーを使用した。調査区遠景、全景の垂直写真撮影等の撮影は業者に委託し、ラジコンヘリコプター、セスナ機を用いて写真撮影を行った。調査終了前には、現地説明会を行い、地域住民の埋蔵文化財への理解を深めるよう努めた。

茶屋辻遺跡

重機（バックホー）を用いて表土を除去したのち、人手により遺構の検出、精査、実測、写真撮影を行った。遺構実測は1/20の縮尺で人手により記録した。写真撮影には、6×7判（モノクロ）1台と35㎜判（モノクロ、リバーサル）2台を利用した。基準点測量は、業者に委託した。

整 理 作 業

出土した土器は水洗いした後、出土位置をマーキングし、接合復元し、実測を行った。現地で作成した図面は、報告書用に編集し清書した。発掘調査で得た成果を原稿にまとめ、印刷に付した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地 理 的 環 境

東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理事業が実施された掛川市杉谷・上張地区は、ＪＲ掛川駅から南東へ約１㎞の地域に位置する。平成５年に東名掛川インター―チェンジが建設されてから、その景観は大きく変化している。

掛川市は、南東には粟ケ岳を中心とする日坂山地、北には八高山山地、南には小笠山、掛川丘陵によって囲まれている。杉谷・上張地区はこの掛川丘陵の北端にあたる。地層は、新第３紀鮮新世に堆積した掛川層群から成り立っている。掛川層群は、東は相良町萩間南方から西は天竜川左岸までの広い地域にわたって分布しているが、掛川付近を境に東と西とでは堆積状況が異なっている。当地区が含まれる東側は、砂岩とシルト岩が規則的に堆積する堀の内砂泥互層の上に土方泥層が堆積している。岩質はやわらかく侵食されやすいため、開析がすすみ侵食谷が樹枝状に発達し、起伏のある地形を作り出している。

第２節　歴 史 的 環 境

掛川市は県内でも横穴が数多く分布する地域である。そのなかで杉谷・上張地区は、数基～十数基で構成される中小規模の横穴群が数多く分布する地域として知られてきた。東名高速道路造成の際に横穴は確認されており、東名掛川インターチェンジの造成工事に先立つ発掘調査においても、12基の横穴が確認されている。今回の東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地区画整理地内の発掘調査においても多くの横穴が調査された。このように掛川市内においても横穴が集中して分布する地域である。（第１図参照）

それでは、その他の時代の様相はどうであったのだろうか。地理的環境で述べたように掛川丘陵が開析され、小さな侵食谷からなるこの地域では、沖積地が非常に狭く生活の場としては適さなかったようで、弥生時代以前の遺跡は確認されていない。古墳時代になると前期の土器を伴う遺構が、わずかに今回の調査で確認された。依然、生活遺構はほとんど認められないものの、古墳時代後期の横穴築造に先立ち、古墳時代中期の木棺直葬墳が尾根上に数基点在するようになる。その後、数多くの横穴が丘陵斜面に造られている。恐らく、墓を造った集団は、掛川丘陵の北側に広がる逆川左岸の沖積地に居住していたと推定される。

その後の古代、中世の遺跡は確認されていない。遺跡として確認されているのは、小笠山の北東に位置する青田山砦と杉谷城である。青田山砦は、徳川家康が永禄11年（1568）から12年にかけて行った今川氏真が籠る掛川城攻めの際に築いた砦である。（『武徳編年集成』、『松平記』による。）標高108m、掛川城からは南東２㎞に位置する。掛川城をはじめ、掛川城攻めの際に築かれた笠町砦、金丸山砦、河田砦など一望することができる。杉谷城とは500ｍの近距離である。また、相良から信州に至る「塩の道」のルートでもあり、南北交通の要衝であった。一方、杉谷城の位置づけは明確ではない。文化文政年間（1804～1830）に編纂された『掛川誌稿』の杉谷村についての記述では、「西の谷の中姥ヶ谷と云所に城山あり、何人の砦にや、山上溝塁の跡儼然たり」と記されている。今回、発掘調査によりその位置づけを明確にすることができた。

第3章　杉　　谷　　城

調査面積は、57,333㎡であるが、この調査地域内には城に関連する遺構が広く認められ、その他H地区では古墳時代前期の土器を伴う遺構、E地区、主郭、三ノ郭の各地点から集石遺構、A地区から炭窯1を確認した。

第１節　城に関する遺構

１．主　郭（第３、４、５、６、９図参照）

主郭とした地点は、標高81.6ｍに位置し、南北36m、東西９ｍの平坦部が広がっている。東側は、２段の平坦部が認められ谷へと傾斜し、西側は緩やかな傾斜でH地区へと向かっている。南東部は、尾根上幅約３ｍの狭い平坦部でD地区へと続いている。南西部は尾根づたいに下り、三ノ郭へと続いている。北西部には堀切１が存在する。平坦部には、柱穴などの遺構は確認されなかったが、西縁辺部には、長さ27ｍの土塁が築かれていた。最も残存が良好な南側部分では、基部の幅３ｍ、高さ60㎝を測る。北西に向かうにしたがって低くなっていることが確認できる。

出土遺物は、第９図１～4、25である。１は、常滑産の大甕である。主郭平坦部とH地区へ向かう西斜面から口縁部と胴部の破片が多数出土している。破片の一部には接着した痕跡であるアスファルトが付着していた。13世紀後半に位置づけられる。２は、志戸呂産の大皿である。表土下から出土した。16世紀後半に位置づけられる。３は鉄製の釘である。残存長5.34㎝を測る。先端部は欠損している。４は、西斜面から出土した寛永通寶である。25は、凝灰岩製の砥石である。表土中から出土した。重さは94.3ｇを測る。

２．二ノ郭（第３、４、７、８図参照）

主郭北側に位置し、南側は堀切１と竪堀１、北側は堀切２によって独立している。東西は急斜面である。南端部が最も高く標高75.7ｍを測る。この地点は東西４ｍ、南北７ｍのわずかな平坦部をもつ。ここから堀切２に向かい東西８ｍ、南北18mの平坦部は、緩やかに傾斜している。調査当初は、地山を掘り込み堀切２が掘削されたと考えていたが、土層を観察した結果、二ノ郭北端を造成した後、堀切２を掘削していることが確認された。造成を行っているのは、中央部分のみである。この他、二ノ郭に人為的な痕跡は認められず、出土遺物は認められなかった。

３．三ノ郭（第３、４、９図参照）

H地区の平坦部を挟み、主郭の西側に位置する。主郭から尾根上を緩やかに下り、竪堀２を通り三ノ郭へ至る。標高は、73.6ｍを測る。幅10m、長さ55mの平坦部が広がっているが、柱穴などの遺構は確認されなかった。南西部の斜面にトレンチを設定し、竪堀の有無を確認したが、認められなかった。

出土遺物は、第９図10、12のかわらけである。ともに北西部の集石３付近から出土した。10は、16世紀後半、12は18世紀代に位置づけられる。

４．堀切１（第４、７図参照）

主郭と二ノ郭の間に位置する。主郭の形状に沿って北西―南東方向に掘削されている。規模は、上部の幅5.5m、底部の幅50㎝、長さ23m、深さは主郭側から４ｍを測る。底部は、南東から北西に向かい傾斜しているが、ゆるやかな階段状となっている。また、南東部には竪堀１が存在している。出土遺物は、認められなかった。

５．堀切２（第３、４、７、８、９図参照）

二ノ郭とＧ地区の間に位置する。規模は上部最大幅12m、底部の幅１ｍ、長さ44m、深さは二ノ郭側から７ｍを測る。東側は後世の開墾により形状が崩れている。北側の掘り方は、中段に幅１～２ｍの平坦部が設けられている。底部は、西から東へ傾斜し、東端部では、急勾配になる。また東端部の底部は、直径50㎝の小穴が階段状に掘削されている。二ノ郭で述べたように南側肩部の一部分は造成が行なわれたのちに、堀切２を掘削している。造成土は堀切２の堆積土と比較し、白色の地山ブロックが混入する固くしまった土であった。北側部分では、そのような行為は行なわれていない。

出土遺物は、第９図16、17である。16は須恵器の甕の体部片である。17は、すり鉢の口縁部である。18世紀に位置づけられる。

６．竪堀１（第３、４、７図参照）

主郭と二ノ郭の間に位置する。規模は上部の幅２ｍ、底部の幅1.6m、深さ30㎝、長さ4.5mを測る。堀切１の南東部に直行している。出土遺物は、認められなかった。

７．竪堀２（第４、５、６図参照）

主郭から三ノ郭へ通じる谷部の南斜面に位置する。規模は、幅２ｍ、深さ60㎝を測る。出土遺物は、認められなかった。

第２節　Ｈ地点の遺構・遺物（第３、10、11、12図参照）

Ｈ地区は、主郭と三ノ郭に挟まれた東西10m、南北40ｍの北向きの緩やかに傾斜する平坦部である。発掘調査当初、築城時の遺構を確認するためにトレンチを設定した。その結果、城に関連する遺構は確認されなかったが、古墳時代前期に位置づけられる土器を伴う遺構を確認することができた。トレンチ掘削時に、Ａ、Ｂライン土層の第12層から土器が出土した。

ＳＸ01

Ｊ―１区に位置する。土層断面図第４層の黄白色土を掘り込んでいる。これは、Ｂライン土層図の第18層にあたる。規模は、長径5.5m、短径３ｍ、深さは検出面から約1.7ｍを測る。形状はいびつな長楕円形である。

出土遺物は、第12図27～31、43である。すべて土層断面図第12、13層からの出土である。27は、壺の底部である。28は、台付き甕の体部と台部の接合部分である。内面には、煤が付着していた。29、30は高坏の脚部である。31は、小型壺の体部である。表面の摩滅が激しく調整は不明である。43は砥石である。重さ7.64㎏で、石材は砂岩である。両面に使用痕が認められた。

ＳＰ01

Ｊ－４区に位置する。トレンチ掘削時に確認できず、遺構の半分を欠損してしまった。長径１ｍ、深さは検出面から20㎝を測る。形状は残存した部分から長方形であったと推定される。ＳＸ01同様に黄白色土を掘り込んでいる。覆土中には、0.5～１㎝の焼土ブロックが混入していた。また、床面からも焼土ブロックが検出された。この遺構に伴う出土遺物は認められなかった。

その他

遺構以外から出土した遺物は第12図26、32～42、44である。26は、Ｊ－３区から出土した複合口縁部の壺である。色調は青灰色で、軽石状の細かい気泡が観察でき焼きひずみが認められることから、高温で焼成されたと推定される。32は重機掘削時に出土した小型壺の上部である。33～35は、高坏の脚部である。33はＪ－２区、34はＪ－５区、35はＫ－２区の遺構確認面からそれぞれ出土した。36は、Ｋ－２区から出土した壺底である。38は、Ｋ－３区から出土した高坏の坏部である。表面の摩滅が激しく調整は不明である。37は、出土地不明の高坏である。39～42はＤ－Ｄ'土層掘削時に出土した。ＳＸ01に伴う可能性がある。39と40は同一個体の壺の体部と底部である。41は小型丸底坩、42は高坏脚部である。44は、Ｉ－５区から出土した頁岩製の石鏃である。先端部を欠いている。重さは0.9ｇである。

第３節　その他の地点の遺構・遺物

１．集石遺構（第13図参照）

集石１

主郭北端部に位置する。拳大の礫が表土直下で2.5m四方の範囲に認められた。規則的に並べられているようではない。周囲に礫に伴う掘り込みも確認できなかった。また、出土遺物も認められなかった。

集石２

Ｅ地区に位置する。集石１同様に拳大の礫が表土直下で１ｍ四方の範囲に認められた。集石１と比較し、狭い範囲に集中していることが確認できる。集石１同様に礫に伴う掘り込み、出土遺物は認められなかった。

集石３

三ノ郭北部に位置する。拳大の礫が３個ずつ２列に並べられていた。礫と礫の間の距離は、約10㎝を測る。礫に伴う掘り込み、出土遺物は認められなかった。

２．炭窯（第14図参照）

ＳＹ01

Ａ地区南端部に位置する炭窯である。規模は幅１ｍ、長さ４ｍを測る。残存状況は悪く、わずかな掘り込みが確認できただけである。中央部分には焼土が認められた。出土遺物は認められなかった。

炭１

三ノ郭北端部に位置する。直径30㎝の範囲に厚さ２㎝の炭が確認された。出土遺物は認められなかった。

３．その他（第３、９図参照）

各地点から出土した遺物について述べていく。

Ａ地区　ＳＹ01を検出した。その他に遺構、遺物は認められなかった。

Ｂ地区　遺構は確認されなかったが、第９図21～23が出土した。21は、山茶碗の底部である。13世紀に位置づけられる。22は、瀬戸美濃産の皿である。23は、瀬戸美濃産のすり鉢である。江戸時代に位置づけられる。

Ｃ地区　遺構、遺物は確認されなかった。

Ｄ地区　後世の開墾により平坦部は削平されている。標高は82mで、発掘調査地内で最も高い地点である。遺構は確認されなかったが、第９図５～７、９、13～15、24が出土した。５～７は、山茶碗の底部である。12世紀前半に位置づけられる。９は、北西の斜面から出土した瀬戸美濃産の坏と思われる。16世紀前半に位置づけられる。13は、北西の斜面から出土した志戸呂産のすり鉢である。残存部分が少なく、口径は不明である。18世紀に位置づけられる。14は、北西斜面から出土した志戸呂産の徳利である。15は、南斜面から出土した瀬戸美濃産の鉢である。18世紀後半～19世紀に位置づけられる。24は、凝灰岩製の砥石である。重さ99.1ｇを測る。

Ｅ地区　集石２に伴う遺物は確認されなかったが、北端部で第９図８のかわらけが出土した。外面にはこげ跡が残る。15世紀末から16世紀前半に位置づけられる。

Ｆ地区　遺構、遺物は確認されなかった。

Ｇ地区　遺構、遺物は確認されなかった。

Ｈ地区　第９図18～20が出土した。18は、須恵器小片で小型の壺の口縁部と思われる。19は、灰釉の碗の底部である。20は、瀬戸美濃産のすり鉢の口縁部である。主郭トレンチからも同一個体が出土している。16世紀後半に位置づけられる。

第４節　小結

57,333㎡にもおよぶ面積の発掘調査を行ない、出土遺物はテンバコ３箱と少なかったが、大きな成果を挙げることできた。

まず第１に杉谷城の築城時期およびその内容を確認することができた。調査では、城に関する遺構として、堀切２、竪堀２、土塁１が確認された。これらの施設は、主郭、二ノ郭を防御するためのもので、北側に強い意識をもっていることが窺える。杉谷城の北西２㎞には、掛川城を望むことができる。掛川城をめぐる戦いでは、多くの文献にその内容が記されている。そのなかでは、掛川城を包囲するために幾つかの砦が築かれたという記載があるが、杉谷城の名前は挙げられていない。しかし杉谷城の位置、遺構の配置を確認すると、永禄年間の掛川城攻めの際に築かれたと考えるのが自然である。郭の名称は三ノ郭までとしたが、この時期の遺物がＤ、Ｅ地点からも出土していることから、遺構は確認されなかったが、この両地点までが城として機能していたと考えられる。なお、家康が掛川城攻めに費やした年月は、１年余りである。城は、兵が常時生活していた場ではなく、見張りや臨戦態勢に臨んだ場合に使用されたもので、出土遺物が少ないことも納得できる。

第２の成果としては、Ｈ地区から古墳時代前期の土坑１と数基の小穴が確認されたことである。近年掛川市内では、やせた尾根上に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が確認されているが、このような狭い谷部では、従来、遺構は確認されていない。当期の集落が周辺にも認められていないため、

どのような性格の遺構であったのか不明である。また、出土土器の中には高温で焼成されたと思われるものも認められるため、今後土器焼成土坑の可能性を含め検討する必要がある。

また、尾根上で３つの集石遺構が確認された。集石に伴う遺物がなく、時期もその性格も不明である。今回、類例の調査を行わなかったが、いずれあらためて検討したいと思う。

出土遺物の量は少なかったものの、古墳時代前期から近世に至るまでの遺物が確認された。しかし、今回の調査で最大の成果は、何と言っても永禄年間に築城された杉谷城が明らかになった点につきる。

最後に発掘調査時から報告書作成に至るまで、城郭に関して知識不足であった調査者に御指導、御助言をいただいた加藤理文氏、松井一明氏をはじめ織豊期城郭研究会の皆様に深く御礼を申しあげたい。

第4章　茶屋辻遺跡

斜面地に不明遺構２基を確認した。

ＳＸ01（第15図参照）

標高41.4ｍに位置する。入り口から奥壁まで2.9ｍを測る。入り口部分は、幅40㎝で内部まで1.2ｍを測る。内部は幅2.2m、奥行き1.5ｍの長方形に掘削され、東側部がいびつに張り出している。排水溝と思われる溝が南東部で角をもち、巡っていることから横穴として掘削された可能性も考えられる。西側には、幅30㎝、長さ1.2ｍに排水溝が巡り棺座状の造りだしが認められる。天井部が残存している部分から横断面の形状は、かまぼこ形といえる。長方形に掘削された部分と東に張り出した部分の壁には、それぞれ異なった工具痕が残されていた。横穴として掘削され、後世に防空壕や芋穴として使用されたのだろうか。出土遺物は認められなかった。

ＳＸ02（第16図参照）

標高46.2ｍに位置する。入り口から奥壁まで５ｍを測る。入り口部分は、幅20㎝で内部まで２ｍを測る。内部は幅2.2m、奥行き2.9ｍの柄鏡状の平面形状であった。天井部は崩落している。出土遺物は認められなかった。形状からみて、横穴の可能性は極めて低いと考えられる。

附　載

徳川家康による掛川城包囲網と杉谷城

加　藤　理　文（織豊期城郭研究会）

１．徳川家康の遠江侵攻

永禄11年（1568）２月、徳川家康は、松平家忠に下知状を与え、宇津山城（湖西市）への移動を命じ（「丹波亀山松平家譜」）、遠江侵攻に向け動き出した。今川義元亡き後、武田信玄は駿河・甲斐の同盟を破棄し、駿河進出を虎視眈々と狙っていた。織田信長と武田信玄が同盟関係にあり、その武田と今川が同盟者であったがために、遠江進出を差し控えていた家康であったが、この同盟破棄を契機に一気に遠江進出を開始した。４月には、二俣城（天竜市）の二股左衛門尉、久野城（袋井市）の久野宗能が家康方となっている（『家忠日記増補追加』）。しかし、８月に天野藤秀は、内通を拒否している（「唐津小笠原家文書」）ことから、家康の調略は順調に推移したとは言いがたい状況であった。９月には、遠江国地下人らが味方になったことを喜んで、家康は褒美を定めてもいる（「唐津小笠原家文書」）。

12月12日、吉田城（愛知県豊橋市）主であり、東三河家老職の酒井忠次を先鋒とし、遠江侵攻戦の幕が切って落とされた。家康は、三河勢７千余を率い、三河国境から本坂峠を越え、井伊谷筋を通り遠江へと入っている。翌日には、吉美城（湖西市）が落城、また井伊谷城（三ケ日町の千頭峯城か？）、刑部城（細江町）、白須賀城（湖西市）も陥落したという（『松平記』）。15日には今川重臣小原鎮実に奪取された宇津山城も落城し（『正太寺文書』）、浜名湖周辺域の制圧にほぼ成功したようである。一週間後の18日には、長下郡安間村に陣を構え、伊奈から遠江へ侵攻していた秋山信友を撤退させ、遠江の要衝である引馬城（後の浜松城）に家康は入城を果たしている（『浜松御在城記』・『譜牒余録』）。

三河・遠江国境付近から、徳川軍の怒涛の進撃を可能したのは、井伊谷三人衆と呼ばれる菅沼忠久・近藤康用・鈴木重時の道案内があったからであろう。家康は、井伊谷三人衆に対し本領安堵の上加増を約し（「鈴木文書」）、その配下に加えたのである。家康が引馬城に入った２日後、磐田市に本拠を置く匂坂吉政に見取郷等を与えている（「匂坂文書」）。家康の勢力は、徐々に遠江を席捲しようとしていた。この状態を見た今川配下の武将のうち、高天神城（大東町）主小笠原長忠、馬伏塚城（浅羽町）主小笠原氏興らが12月中に家康の軍門に降っている（『譜牒余録』等）。21日には、久野氏一門の本領を安堵している（「久野文書」）。26日には、鵜殿氏長、松井和泉守らに二俣城の防備を命じ、所領を安堵している（『譜牒余録』）。さらに、28日久野千菊にも所領を与え、遠江国人・土豪層の徹底した懐柔策を実施している。旧今川配下の武将たちは、西から侵攻してくる徳川につくか、北から侵攻してくる武田につくか、そのまま今川家に組するかで、内部分裂を含めその対応に苦慮したようである。特に、信濃、駿河と国境を接する地域の領主は、三方から同一の本領安堵状を得ることもあり、生き残りにかけて必死な姿が浮かんでくる。

一方、武田晴信（信玄）も時を同じくして12月６日、駿河へと侵攻した（『家忠日記増補追加』等）。晴信は、家臣山県正景を家康に遣わし、大井川を境として、駿河を武田が、遠江を徳川が領有するという提案をしたと伝わる（『御年譜微考』）。12月13日、武田軍の軍勢が駿府に乱入、当主今川氏真はわずか50騎ばかりの味方と共に、間道を利用して掛川城へ逃れた（『当代記』等）。掛川城は、今川家の重臣朝比奈泰朝が守っていたが、27日は、早くも家康軍によって包囲され、城下にも火が放たれている。

この時期、浜名湖東岸にあって未だ降伏していない大沢基胤は、堀江城（浜松市）に籠り徹底抗戦を試みた（「大沢文書」）。明けて永禄12年正月に、大沢基胤らは宇布見砦（雄踏町）を攻撃、敵船を奪取し

周辺農民に一揆を蜂起させている（「大沢文書」）。一揆勢は、旧今川方土豪たちを後ろ盾に堀川城（細江町）を築き、2500人余で籠城、家康に抵抗した。この一揆によって宇津山城が再び今川方の手に渡ってしまう。掛川攻めの背後でうごめく旧今川勢力の抵抗に対し、３月６日、家康は一族の松平（形原）家忠を派遣、宇津山城を再奪還し、堀江城に対しても井伊谷三人衆に攻めさせている（『家忠日記増補追加』）。３月末～４月初めにかけて、堀川城、佐久城（三ケ日町）が落城し、唯一堀江城のみが抵抗している状況となった。奥浜名湖の抵抗勢力を孤立させた家康は、再び今川氏真が籠もる掛川城攻めにその主力を配している。

２．掛 川 城 攻 め

掛川城攻めに当たって、家康がいかに旧今川配下の周辺諸将に対し、気をくばっていたかを知る文書や記録が残されている。大久保忠教の『三河物語』によれば、「然処に、久野（宗能）ヵ庶子共に久野佐土（宗憲）・同日向守（宗成）・同弾正（宗政）・同淡路（宗益）・本間十右衛門尉（政季）申ケルハ、爰にて人ト成処なり、イサヤ、家康え敵に成て、懸河ト相挟ミて、爰ヲ退カセ申間敷、久野ヵ敵ヲスルナラハ、遠江内之侍立ハ、一寄モ不被残シテ、敵に成てクツ帰、スヘシサモアラハ、国中之一騎共モ、此方彼方より起ルヘキ、然は、家康モ深入ヲシて御ハ、綻え入タル心なり、イササラハ、惣領職に聞カせントテ、久野三郎左衛門（宗能）に申ケレハ、何れモ申処尤にハアレ共、然ト云に、一度氏真え逆心ヲシて、家康之御手ヲ取奉て氏真え弓ヲ引ク事ヲサえ、侍之弓矢之義理ヲチカエタルト思えハ、夜之目モ不被寝シテ、人之取仕迄モ面目無シテ赤面スルに、程モ無シテ又、家康え逆心ヲスル物ナラハ、二張ノ弓なり、其故、人之取仕にも、内股膏薬とて後指ヲ指レハ、命ナカラエテモ益モ無、一心に家康え思ひ付給えトテ承引ナケレハ…」
とある。結局、久野宗能は、家康に忠誠を誓っている。これに対して家康は、12月21日久野宗能に弐千五百貫文に値する土地を与え、さらに28日浜松へ人質として差し出した宗能の子息千菊に対しても所領を与えている（「久野文書」）。

家康にとって、氏真が籠もる掛川城を陥落させることが、遠江一円支配に繋がることであった。そのためには、掛川城より西側一帯を領有する旧今川配下の実力者・久野氏一族を味方に引き入れ、背後の安全を確保すると共に、「久野までもが家康に味方した」という実績がほしかったのであろう。戦わずして、家康に組する領主たちには本領安堵を約し、平和裏に遠江の一円支配をめざす大方針であったことが伺える。

久野氏を味方に引き入れた家康は、28日、掛川城の四方に砦を構え、見付へと帰陣している（『家忠日記増補追加』）。明けて正月２日、前年８月に内通を拒否した天野藤秀に対し、犬井等五百貫文の土地を与えている（「内山家寄託文書」）。さらに、11日中山又七に山名荘の内を（「富永文書」）、牧野源介に長溝郷の内を（「早稲田大学荻野研究室所蔵文書」）、大村高信に勝間田の内（「御家中諸士先祖書」）などを安堵している。12日には、大村高信に西之屋村の内を（「御家中諸士先祖書」）、大村弥十郎に小池村の内を（「歴代古案二」）、15日に加々爪政豊に新池脇の内などを与えている（「記録御用所本古文書二」）。こうして、遠江の国人・土豪層を調略により、次々と味方に引き入れ、掛川城を孤立させることに成功したのである。

こうした状況下の正月16日、家康は本格的に掛川城攻めを開始した。青田山砦に小笠原長忠、二藤山に岡崎衆番手、金丸山砦に久野宗能らを入れ、家康自身は本隊を率い、17日天王山に陣を布いている（『家忠日記増補追加』）。20日には、棚草郷（小笠郡）の内などを、小笠原清有に与えている（「小笠原文書」）。

同日、今川氏真は、久野一族を味方に付けようとするが、久野宗能らは家康に報告し、弟・叔父らと共に、家康方に属すこと及び今川勢の動向を伝えている（『家忠日記増補追加』）。この日から23日にかけて、今川方と徳川方の本陣・天王山砦をめぐり大規模な合戦がおこっており、今川方に多数の死傷者が出たようである（『享禄以来年代記』・『北条記』・『家忠日記増補追加』等）。

これらの記録を見ると、今川方はただ城に籠もっていただけでなく、周辺諸将に対し調略の手を伸ばしたり、城から外に討って出ていたことが判明する。

天王山をめぐる戦いの後の26日、石谷政清に飛鳥内一色の内を（「記録御用所本古文書一」）、28日には朝比奈十左衛門尉らに、初馬の内などを与えている（「朝比奈文書」）。２月に入ると２日、里之郷の内などを、江間一成に安堵（「紀伊国古文書所収藩中古文書」）。19日、松下筑後入道に、浜松荘内本知行地を安堵（「古文書所収川口七郎右衛門家蔵文書」）。26日、宇間郷等を都筑秀綱に安堵（「都筑家文書」）。３月２日には、西郷清員に、替地を与える（「記録御用所本古文書十一」）など、休む間もなく調略活動を続けている。また、２月４日には、同盟者である織田信長が、家康に掛川城攻めの応援の船と若干の兵を派遣することを約束している。

４日、再度家康は掛川へと出陣し、翌５日、本多忠勝、松平伊忠を先陣として掛川城を攻めている。この戦いによって、今川方戦死者100余人、徳川方戦死者60余人であったという（『家忠日記増補追加』）。この戦いの後の８日に、家康は、氏真に使者を遣わして和睦を求めることになる（『松平記』・『北条記』、『家忠日記増補追加』では、４月12日条に見える）。13日、河田長親が、徳川方に今川氏との和睦を促している（「田島文書」）。掛川城に籠る今川方の根強い抵抗の中、未だ遠江国内状況が不安定の中での長期戦は、決して家康にとって望む展開ではなかったはずである。それが、氏真との和睦による掛川城開城へと決断させた真意ではないだろうか。

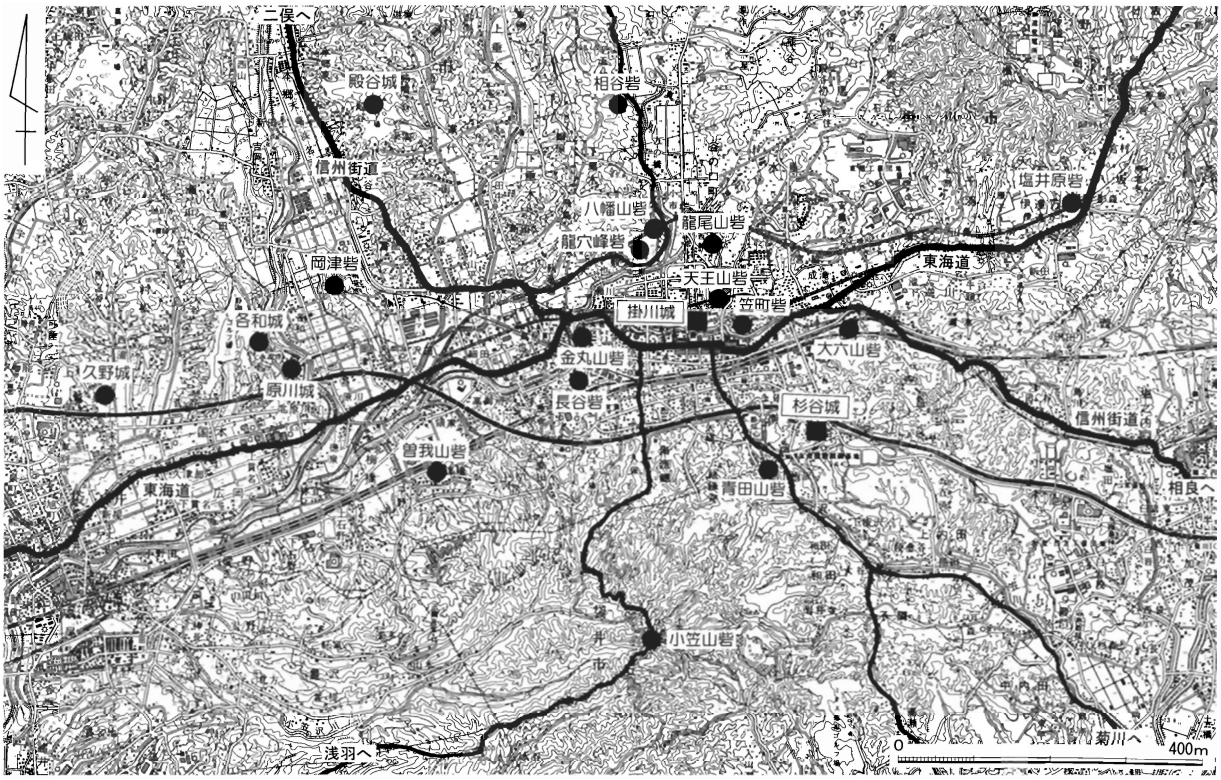
和睦を図る中、徹底抗戦を続ける堀江城の大沢基胤らに調略の手を伸ばしていたことが、掛川城へ通報した文書から知れる（「大沢文書」）。８日には、掛川城の人質に別条ないことなどを、天野藤秀に誓っている（「天野文書」）。12日、大沢基胤らに起請文を与え、呉松等を安堵することを伝えている（『譜牒余録』）。13日、奥山定友らに、奥山の内を安堵し（「奥山文書」）、天野藤秀にも、犬井等を安堵している（「内山家寄託文書」）。執拗な家康の懐柔策と今川氏の凋落により、抵抗勢力も沈静傾向へと向かい、家康による遠江確保が見えてきていた。

５月６日、ついに氏真は掛川城を家康に明渡し、義父北条氏康の兵と共に　掛塚から小田原へと向かった（『家忠日記増補追加』・『今川家譜』等）。小和田哲男氏は、これらの記録から家康と氏真の講和が成立したのが５月６日で、実際に城を出たのが５月15日という可能性を指摘している（『掛川市史　資料編　古代・中世』）。

掛川城の開城によって、戦国大名今川氏が滅亡し、家康は遠江一円をほぼ掌中に納めることとなった。しかし、遠江の内北部山岳地帯は、信濃と国境を接しており、武田方に付く国人武将達も多く、完全に遠江全域の支配権が確立したのは、天正４年（1576）頃のことになる。

３．杉谷城の構造と役割

家康は、掛川城攻めにあたり、杉谷城を初めとする陣所を設け、包囲網を構築している。『武徳編年集成』等によると、永禄11年から龍尾山砦・龍穴峰砦・次郎丸砦（八幡山砦）・相谷砦・金丸山砦・青田山砦・長屋砦・曽我山砦・岡津砦（山崎砦）・笠町砦・塩井原砦・二瀬川砦・小笠山砦等を築き、徐々に掛川城包囲網を狭めている。



第１図　掛川城攻めにおける徳川軍の城砦群位置図

家康が構築した砦群が、どのような構造をしていたかは判然としない。『武徳編年集成』にわずかながらであるが、関連する記述が見られる程度である。相谷砦の記述で、永禄11年12月条に「味方ノ六備掛川ノ城下ニ迫リ御旗本ハ相谷ニ屯ヲ設ケ玉フ…」とあり、兵が駐屯する場所を設けたことがわかる。次いで、長屋砦の記述で、永禄11年極月条に「桑田村ニハ酒井忠次、石川家成柵ヲ結テ守リケルガ…」とあり、柵で囲って守っていたと記されている。また金丸山砦では、永禄11年極月条で「金丸山ノ附城ニハ本丸ニ久野宗能同二ノ丸ニ同佐渡宗憲、本間五郎兵衛長秀ヲ籠置ル」とあり、本丸と二の丸が存在する砦であったことが伺える。掛川城攻めにあたり、大小様々な砦群が構築されたわけだが、駐屯基地とするため、柵囲いで防備した砦、本丸・二の丸というように、複数の曲輪が存在した砦と、目的や場所によって、その構造がかなり異なっていたことが想定される。

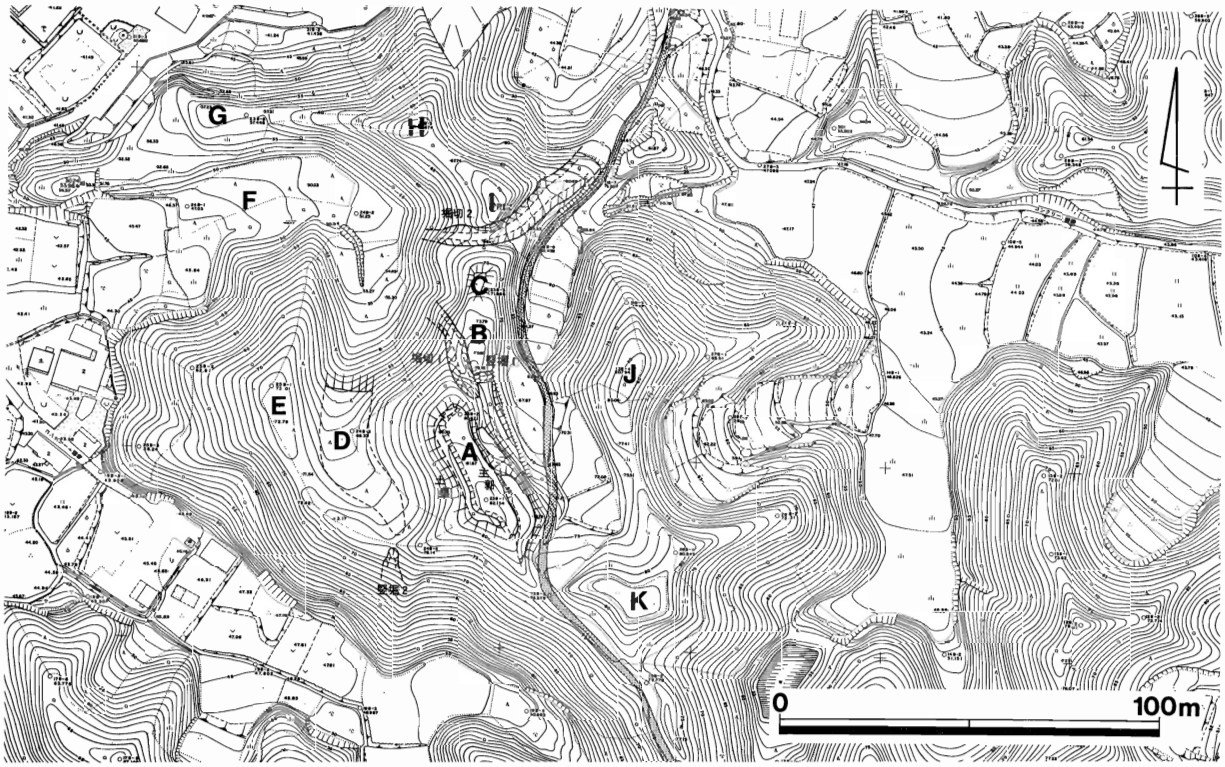
では、今回調査された杉谷城はどのような構造をし、何を目的として築かれた砦であったのだろうか。発掘調査結果等から考えてみたい。城跡は、掛川城の南東約２㎞に位置し、南北約150m×東西約100mほどの規模を持つ。明瞭に城郭施設として利用されたのは、標高約82mの最高所に位置する南北約35m×東西約10mの主郭のみである。主郭は、東側を除きコ字状に土塁が築かれ、東側下段に三段の腰曲輪状の平坦地が残る。土塁は、明らかに西側に対する備えである。南側腰曲輪については、主郭への入口部分にあたるものと推定されるが、明瞭な遺構は確認されていない。北側二ヵ所の腰曲輪は、東側谷筋に対する備えであろう。北側尾根筋を幅７m前後の堀切１と竪堀１によって遮断しているが、南側に位置する主郭とほぼ同規模・標高の頂部Ｋとの間は、自然地形のままである。堀切１は、北側Ｂ曲輪の西側を廻りこんで、北西方向へと落ち込んでゆく。土塁・堀切１は、軸を合わせるように設けられており、西側谷筋からの攻撃を想定したようである。副郭にあたるのが南北約25m×東西約８mを測るＢ・Ｃである。Ｂは、南から北にかけて、５m程低くなってゆくが、最北端に３×５m程の高まりＣが見られる。

土塁の痕跡ということも想定されるが、北側対岸Ｉとの間の橋台ということも考えられないことではない。仮に橋があったとしても、自然木を２～３本並べただけの簡易的な橋であったと推定される。副郭における人為的な痕跡は、このＣ部分のみで、他は自然地形のままである。従って、あくまで主郭を補完する予備曲輪であったことになる。副郭北側に、城内最大の堀切２（幅約10m・深さ６ｍ）が見られるが、一部後世の道として利用されているため、当初の規模は判然としない。主郭に比較すれば、副郭は南北を堀切で囲まれた独立曲輪となっている。副郭を独立させることで、主郭は北側に対して、より強固な防備を有することになる。いずれにしろ、この堀切２以南、主郭までが防御施設として利用された範囲であることは確実であろう。『武徳編年集成』に残る長屋砦や金丸山砦の記載とほぼ合致するような状況を呈している。従って、この両曲輪の周辺に柵等が廻っていた程度ということになろう。

主郭の南西部に、竪堀２が見られるが、これは主郭の西側対岸に位置するＥへの通路を規制するものと考えられる。主郭から尾根上を通路としてＥに至っていたことが想定される。しかし、副郭と同規模のＥには、人工的な加工の痕跡は見られない。このＥと主郭に挟まれたなだらかな平坦地Ｄでは、北側部分に人為的な削平が見られるが、近代の開墾に伴う削平の可能性も捨て切れない。しかし、竪堀２の存在を考えると、何らかの利用があったとしても問題はあるまい。

東側対岸に位置する丘陵頂部のＪも、Ｅ同様人工的な加工の痕跡は見られない。Ｊから南側Ｋに至る斜面西側下段に三段の階段状の平坦地が存在するが、これは近代の茶畑開墾に伴い東側斜面を削り平坦地にしたもので、城郭施設に伴うものではない。

副郭の北側に東西に広がる約100m程の尾根筋があるが、ここには、西からＧ、Ｈ、Ｉという三ヶ所の頂部が存在する。掛川城に対しては、最前線に当たるため何らかの人工的改変を想定したが、まったくその痕跡は見られず、自然地形のままであった。特にＩは、Ｃに対応する橋台状の遺構の存在も推定されたが、人為的改変の痕跡は認められなかった。この尾根筋の南側麓、Ｅとの間に、やはり大規模な平



第２図　杉谷城概要図

坦地Ｆが存在している。このＦも何らかの利用が想定される。

以上、杉谷城について概観してみたが、主郭・副郭及びＤの平坦面以外が、まったく利用されていなかったというわけでもない。ただ人為的な痕跡が見られないということである。おそらく、北側に位置する尾根上の頂部Ｇ・Ｈ・Ｉ、主郭西側尾根上のＥ、東側尾根上のＪなどは、臨戦態勢下においては、見張りを兼ねて兵が置かれたという可能性は十分考えられる。

周辺域の地形を見ると、確実に城郭施設として利用された主郭・副郭部分を中心に、北・西・東にそれぞれ同規模の尾根筋が展開しており、掛川城に面した北側尾根筋を遮断すれば、東西側は自然の谷地形となり独立丘陵状の地形を呈すことになる。南側の尾根続きを遮断していないことが、この城の目的を明瞭に物語っていよう。南側尾根上は、撤退ルートとして確保されていたと考えられる。杉谷城の西南側約500m離れた位置に青田山砦が存在している。青田山砦は、標高約108mの山頂部を中心に展開する砦で、杉谷城より20m以上高い山塊を利用している。掛川城の南に構築されたのが、杉谷城と青田山砦で、この二城を持って南方の押さえとしていたのである。掛川城に籠城する今川方兵力を考えれば、南側に構築された二城を同時に攻撃することは、ほとんど不可能に近い状況であった。どちらかが攻められた場合、総力戦になる前に撤退し、敵方の退却を待つ程度の押さえとして考えていたのではないだろうか。双方の城が補いあうことによって、無駄な兵力の失うことをさけ、孤立する掛川城の南側の押さえをすることが徳川方の目的であったのであろう。

もう一つの役割は、『武徳編年集成』の岡津砦のことを記した記述から想定される。「神君暫ク軍ヲ休メン為ニ兵ヲ収メント所々ノ附城ニ衛兵ヲ籠置ル、岡津村ノ山崎ニ久野三郎左衛門、本間五郎兵衛ヲオキ…」とあるように、暫くの間兵力を休息させる場所の確保である。杉谷城の主郭東と東北方面山麓部には逆Ｌ字状に広がる平坦地Ｄ・Ｆが存在している。ここが、兵の休息場所として確保されていた可能性が考えられる。北側に広がる尾根によってＤ・Ｆは、掛川城からは死角となる。仮に敵方の攻撃があった場合、なだらかな平坦地を伝わり、さらに尾根筋を通って南側への撤退も可能なのである。その際、主郭から西側斜面に対しては、頭上攻撃が可能となる。主郭からの攻撃の間に、南側への撤収はほぼ完了すると思われる。そのために、主郭西側部分にのみ土塁が構築され、さらに南側尾根上を遮断しなかったのであろう。

杉谷城は、青田山砦と二城でもって、掛川城南方の押さえとしての役割を担っていたのである。主郭及び副郭を防御施設の中心として、堀切や土塁、柵で囲むなどして防御ラインを構築し、南方尾根筋を開け、退却ルートを確保していたことが想定される。また、防御施設西側から西北方面の山麓平坦部を駐屯地とした可能性も指摘される。いずれにしろ、臨戦体制の中で臨機応変な活動拠点として構築され、使用されたのである。その臨機応変な陣城は、主郭・副郭程度を人工的に改変する程度で、その他周辺域に展開する尾根筋などは、木を伐採して視界を確保し見張台として使用した程度ということではないだろうか。永禄年間後半期の徳川軍による陣城の形態を知るに貴重な城跡と評価される。

４．家康の攻城戦と包囲網

攻城戦において、城の周囲に陣城群を築いて包囲網をしくという戦術は、かなり頻繁に使用されている。徳川家康が、この戦術をとったのは、掛川城攻めが最初のことになる。それまで、大規模な城攻めを行ってこなかったということもあろうが、この後この戦術をかなり頻繁に使用することになる。

攻略する城に対して、周囲に陣城（向城）を築く戦術は、多大な兵力の損失を防ぐことは可能だが、準備や築城に時間を要し、長期戦になることは確実である。長期にわたっても、確実に成果が得られる

ことと（開城降伏もしくは落城）、周辺諸状況が安定してなければならない。

この戦術がとられた有名な事例は、豊臣秀吉による小田原城包囲網である。秀吉の本陣であった石垣山城には、天守を初め茶室までもが築かれ、悠々と相手方の消耗を待つ姿が想像される。そうこうしている間に、東北地方の諸将が訪れ、次々と恭順の意を示している。将に秀吉政権の強大な軍事力と経済力を見せ付けた一大デモンストレーションであって、「戦わずして勝つ」という最も堅実な戦であった。その他、織田信長による小谷城、石山本願寺包囲網、羽柴秀吉による鳥取城・三木城包囲網等がある。

家康が行った向城戦は、これ以後三度実施されている。まず、天正３年（1575）６月からの二俣城攻めである。武田方の依田信蕃が守備する二俣城攻略のために、城を取り囲むように東西南北に四ヶ所の砦を築いている。南対岸に鳥羽山砦を築き本陣とし、北の地続きの頂部に蜷原砦を築き大久保忠佐を、東側二俣川を挟んで対峙する位置に毘沙門堂砦を築き本多忠勝を、西側天竜川を挟んで対峙する位置に和田ヶ島砦を築き榊原康政を配置し、城の四方を固めている。結局、二俣城は六ヶ月間持ちこたえるが、兵糧もつき降伏開城している。

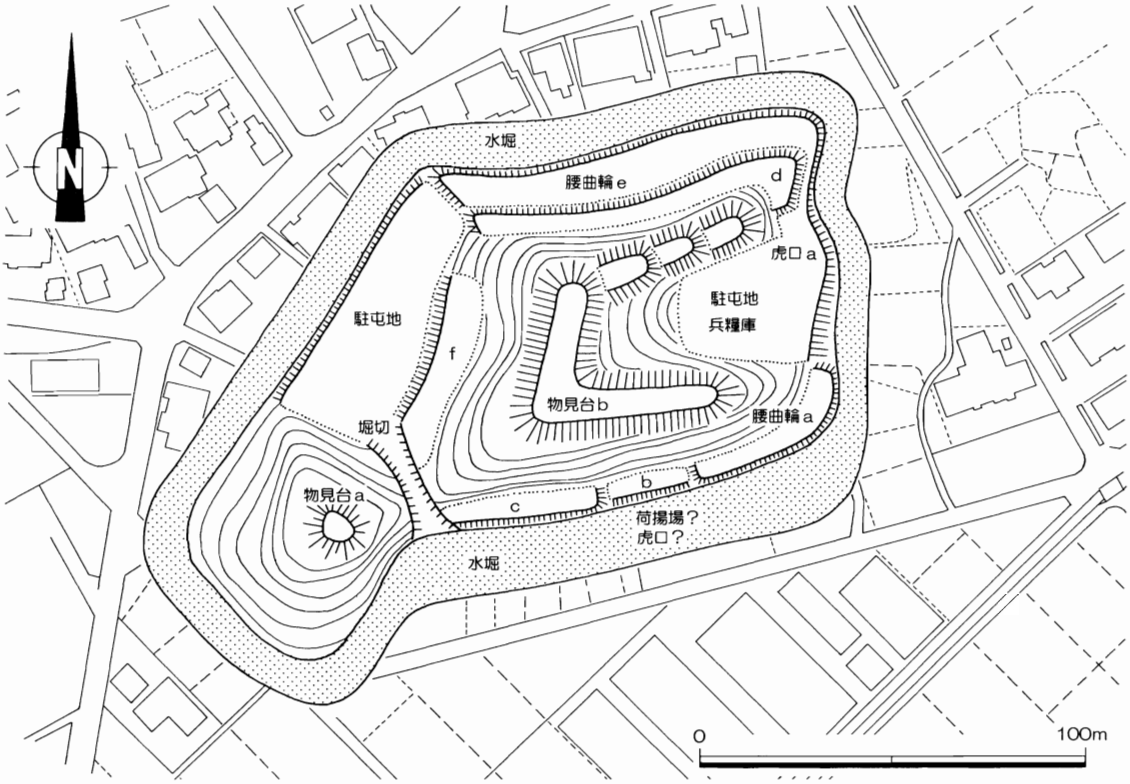
次いで、天正７年10月からの高天神城攻めである。高天神城をコ字形に取り囲むように、北から小笠山砦（石川康通）、風吹砦（石川康通）、能ヶ坂砦（本多備後守）、火ヶ峰砦（大須賀康高）、安威砦（大須賀康高）、獅子ヶ鼻砦（大須賀康高）、中村城山砦（大須賀康高）、三井山砦（酒井重忠）を築き、実に天正９年３月までの16ヶ月に渡って包囲を続けた。『家忠日記』によると、天正６年から８年の終わりにかけて、砦の普請に関わる記載が非常に多く見られる。どのような普請があったかについての記載は少ないが、柵、塀、堀切普請という記載が見られる。掛川攻めの陣城に比較して、はるかに防御性を増した砦であったことが判明する。一昨年、大東町教育委員会によって中村城山砦の試掘調査が実施され、おぼろげながら砦の様子が判明している。

中村城山砦は、高天神六砦のうち最も標高が低く、菊川・下小笠川の合流点近くに築かれている。試掘調査によって、四周を水堀で囲まれていたことがほぼ確実な状況で、水運を利用して横須賀城から物資搬入をしていたことが想定される。丘陵を二分するような堀切が見られる他は、防御施設は確認されない。削平地は山麓部分に広くとってあり、頂部は物見台程度の広さである。このことから、山麓部分に平坦地を設け利用することがこの砦の主目的であったことが看取される。この砦が物資集散と兵力の駐屯基地として利用されたのは、最も水運に恵まれた場所に位置していたためであろう。高天神を囲む駐屯軍の補給物資は、中村城山砦に荷揚げされ、ここを経由して各砦へと運びこまれた可能性が高い。この砦以外の調査が実施されていないため、確実とは言いがたいが、砦個々にそれぞれの主目的があり、互いに補完しあうことで長期の攻城戦を可能にしていたことが考えられる。

このような砦網によって、長期の籠城を余儀なくされた城番岡部長教は、矢文によって降伏を申し出ている。しかし、家康は降伏を許さなかった。そこで、城兵方は最後の血路を開くため、全軍城を討って出た。壮絶な戦いの末、岡部長教は討ち死にし、城は落城している。

家康が実施した、最大にして最後の包囲網は、大坂に残る豊臣家に対するものであった。慶長５年（1600）の関ヶ原合戦によって勝利した家康は、豊臣恩顧の大名達を遠国に配置し、畿内・東海の中枢部・拠点には親徳川の大名を配置している。これ以後、家康による豊臣包囲の築城が始まることになる。まず都の拠点として、慶長６年関ヶ原の前哨戦で消失した伏見城を再建、ついで二条城の造営を開始している。この２城で持って、豊臣方への押さえとした。さらに、隠居城と名をうって駿府城の築城を行い、江戸の前線基地としている。

畿内では、膳所城に戸田一西、彦根城に井伊直政、桑名城に本多忠勝と譜代を配置、伊賀上野城に家



第３図　中村城山砦（大東町）概要図

康の信任厚い藤堂高虎を配置し、大坂から江戸に至るルートの完全な掌握に努めている。豊臣恩顧の西国に対する押さえとして、女婿池田輝政を姫路城に入れ、大改修を実施した。また、大坂から山陽・山陰に通じる要衝の地、丹波篠山城に一族の松平康重を入れている。家康は、これら大坂方に対抗するための総仕上げとして、慶長15年徳川義直を入れるための名古屋築城を開始した。しかし、完成前に大坂の陣により豊臣家が滅亡したため、名古屋城は、中途な状態での完成で工事が終了している。伊賀上野城も同様で、未完の状態のまま工事が終了し、その状態で城は機能することとなった。これら２城の事例は、明らかに豊臣滅亡による工事の縮小、中止であって、これらの築城が対豊臣を意識した築城であったかを示している。

家康自身が、豊臣家を滅亡させようとしていたかどうかは不明である。しかし、豊臣という勢力を封じ込めるために、巨大な包囲網を着々と構築していったことだけは事実である。掛川城攻めで用いた戦術が、規模を大きくして、徳川政権の磐石化のために利用されたのである。

４．ま　と　め

徳川家康が、最初に用いた掛川城包囲戦は、周辺域に足掛かり的な陣所を設け、徐々にその包囲網を狭めて行く戦術であった。そのための一つの拠点が、今回調査された杉谷城である。

県内に残る城跡は、今川氏・武田氏・前期徳川氏（関東移封以前の戦国大名としての時期）・後北条氏・豊臣氏・後期徳川氏（幕府開設により天下政権となった時期）の配下の武将たちの手によった城が大部分である。

中でも、前期徳川氏の手による城は、その後の利用により、大幅な改変を受けており、一大名徳川氏の築城技術がどの程度であったかを知る資料は極めて少ない。その中で、天正年間に築かれた高天神城

攻めの砦群は、往時の姿を良く留める砦も残り、前期徳川氏の築城技術の一端を類推するに極めて貴重な資料を提供している。特に、小笠山砦（掛川市・袋井市・大東町）、山崎城（袋井市）は、現況でも堀切・土塁等が明瞭に確認され、天正年間における徳川軍の築城技術を想定するには格好な城でもある。

今回調査された杉谷城は、これらの城よりさらに古く、永禄年間後半における徳川軍の築城技術を示す極めて稀な城といえよう。『武徳編年集成』に記される「屯ヲ設ケ…」、「柵ヲ結テ守リ…」、「軍ヲ休メ…」、「兵ヲ収メント…」、「兵ヲ籠置ル…」ということは十分可能な城である。これら陣に関する記載や、『家忠日記増補追加』等に残された、戦の推移から、掛川攻めの際の陣城がどのように利用されたかが、今回の調査により明確に推定出来る。これらの陣城の第一目的は、兵力の駐屯と休憩にあったと考えられる。駐屯地を確保するための施設として、柵を設けた簡易的な防御施設が中心部にあったのであろう。徳川軍にとって本国三河を離れ、侵攻を開始しほぼ制圧しつつ遠江であったが、未だその主力をはじめ攻城軍の前線基地となる城郭の確保、または築城に至ってはいない。長期戦を呈してきた情況下で、主力軍を配置し続けるわけにはいかない。そこで、兵力の駐屯と休息が可能な砦群を構築して、浜松もしくは見付から転戦してくる兵に備えたのではないだろうか。

家康は、この後二俣城攻め、高天神城攻めを実施し、掛川城攻めと同様に陣城を築き、敵方城郭を包囲している。この中で、天正６～９年（1578～81）の間に構築された、高天神城攻めの陣城中村城山砦の試掘調査が実施されている。前述のように、この調査により中村城山砦の全体を囲む水堀の存在がほぼ確実な状況で、山麓部周辺のみ大幅に人工的な曲輪を造り出していることが明らかとなっている。最高所は、物見が可能な程度の痩せ尾根で、竪堀等の防御施設は見られない。わずかに二ヵ所存在する頂部を仕切るような堀切が見られる程度ある。大規模な造成を実施しているのに対し、防御施設はほとんど見られない。これは、この砦が防御機能を目的として築かれた陣ではなく、物資の集散と兵の駐屯を目的に築かれたためであろう。

杉谷城の構築が永禄11～12年（1568～69）で、中村城山砦の10年ほど前に築かれた陣ということになる。家康の兵力も、遠江における基盤にも格段の差が生まれているが、陣城にも格段の進歩が見られる。高天神攻めにおける、六砦は明らかに機能分化が進んでおり、各砦ごとに役割分担がなされていたことが推定される。家康は、高天神攻めが短期の攻城戦でなく、長期に渡ることをあらかじめ想定し、それを展望した上で各砦を築いたのであろう。県内における長期にわたる攻城戦は、高天神城をめぐる戦が最長であり、実に７年間に及んでいる。包囲網を布くための砦の構築には、家康配下の重臣クラスまで動員されており、まさに徳川家の総力を結集した一大事業であったと思われる。『家忠日記』の記載から、堀・堀切・柵・塀の普請が行われたことがわかる。

杉谷城を含む掛川城攻めの際を記した『武徳編年集成』は、大部分が兵力の休憩に関する記載であり、わずかに「柵ヲ結テ…」という一文が見られるだけである。これが、永禄末年前後における徳川軍の陣城の様子であろう。高天神城攻めでは、機能分化が進み、各砦ごとに役割分担がなされていたため、六ヶ所の砦で十分機能が果せたのである。しかし、掛川城攻め段階においては、兵力の駐屯と休憩が最命題だったのである。その目的のために、兵力が異動する道脇に数多くの砦群を配したのである。発掘調査で確認された杉谷城の状況からも、防御機能を優先させた陣城ではなかったことが明らかな状況である。防御施設は、記録にある通り柵で囲まれた程度であったのであろう。今回の調査によって、永禄末年前後における徳川軍の陣城の形態と目的が類推されたことは、これまで不明であった前期徳川氏段階の城郭構築技術を知るために、極めて貴重な事例となった。

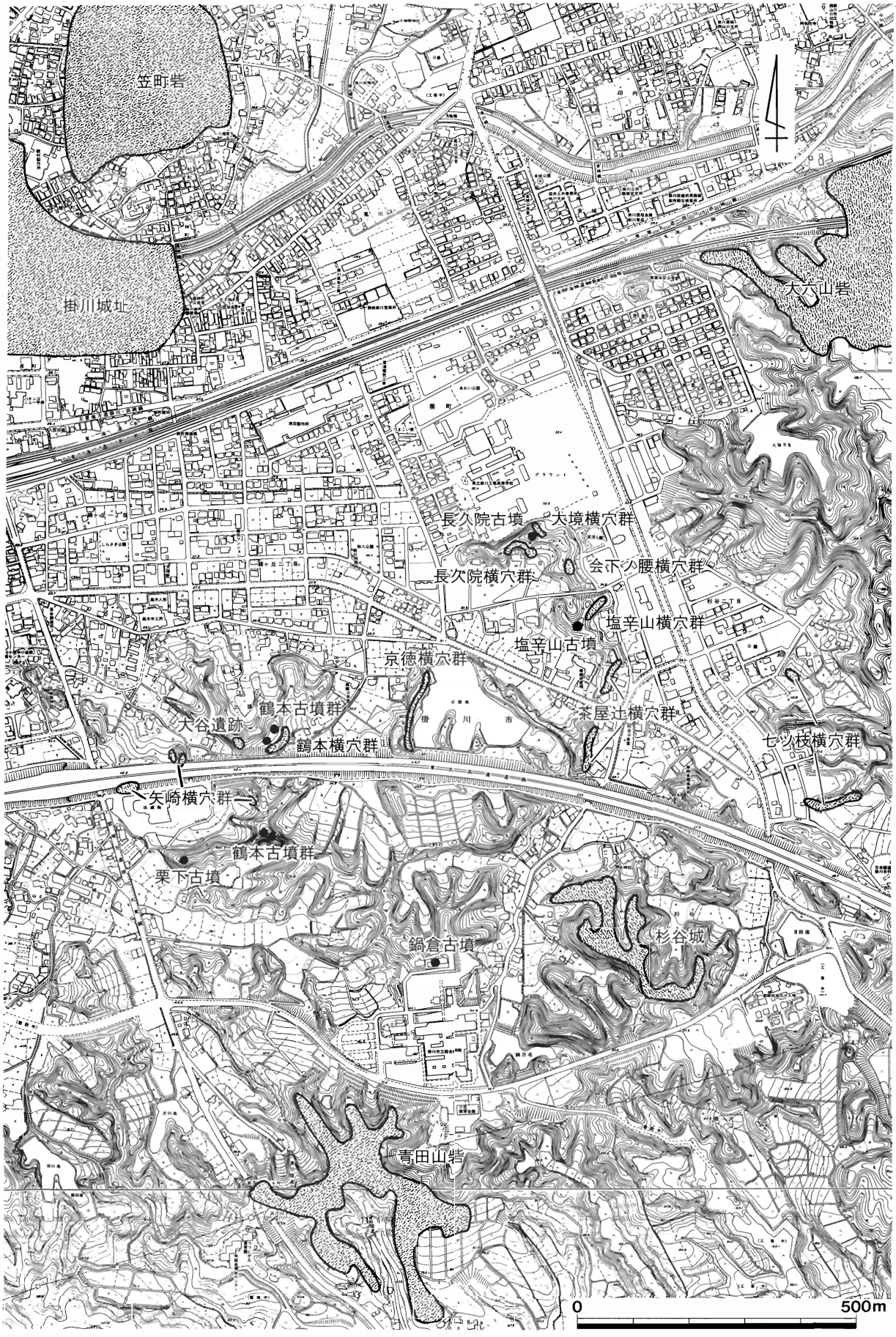
最後になるが本論をまとめるにあたり、調査担当者の井村広巳さんには、調査段階からご無理をお願

いした。また、木戸雅寿、戸塚和美、中井均、松井一明各氏とは、現地において遺構の評価、砦の利用方法等、様々な話し合いを持たせていただいた。中村城山砦については、調査中に大東町教育委員会の鬼沢勝人、夏目不比等両氏に案内と説明をいただいた。記して感謝申し上げたい。

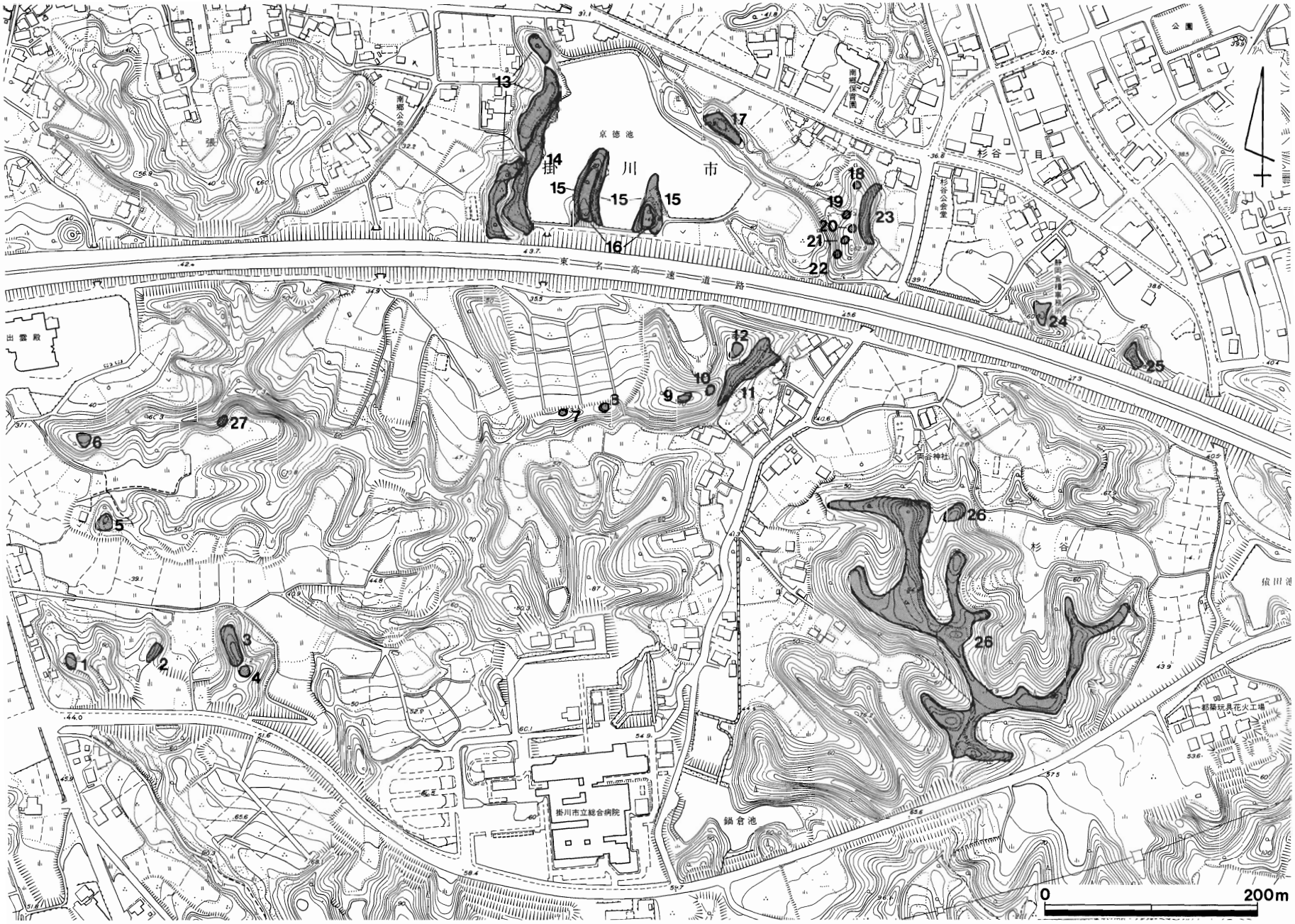
【参考文献】

中田祝夫編：1970　『原本・三河物語』　勉誠社
小和田哲男編：1978　『徳川家康―その重くて遠き道』　新人物往来社
静岡県教育委員会：1981　『静岡県の中世城館跡』　静岡県教育委員会
竹内理三編：1981　『増補續史料大成　家忠日記』　臨川書店
小和田哲男：1989　『三方ヶ原の戦い』　学習研究社
加藤理文：1995　「宇津山城の歴史と構成」『宇津山城跡』　湖西市教育委員会
静岡県：1995　『静岡県史　資料編７　中世三』　静岡県
静岡県：1997　『静岡県史　通史編２　中世』　静岡県
静岡県：1998　『静岡県史　資料編８　中世四』　静岡県
水窪町教委：1994～2000　『高根城Ⅰ～Ⅵ』　水窪町教育委員会
掛川市：2000　『掛川市史　資料編　古代・中世』　掛川市

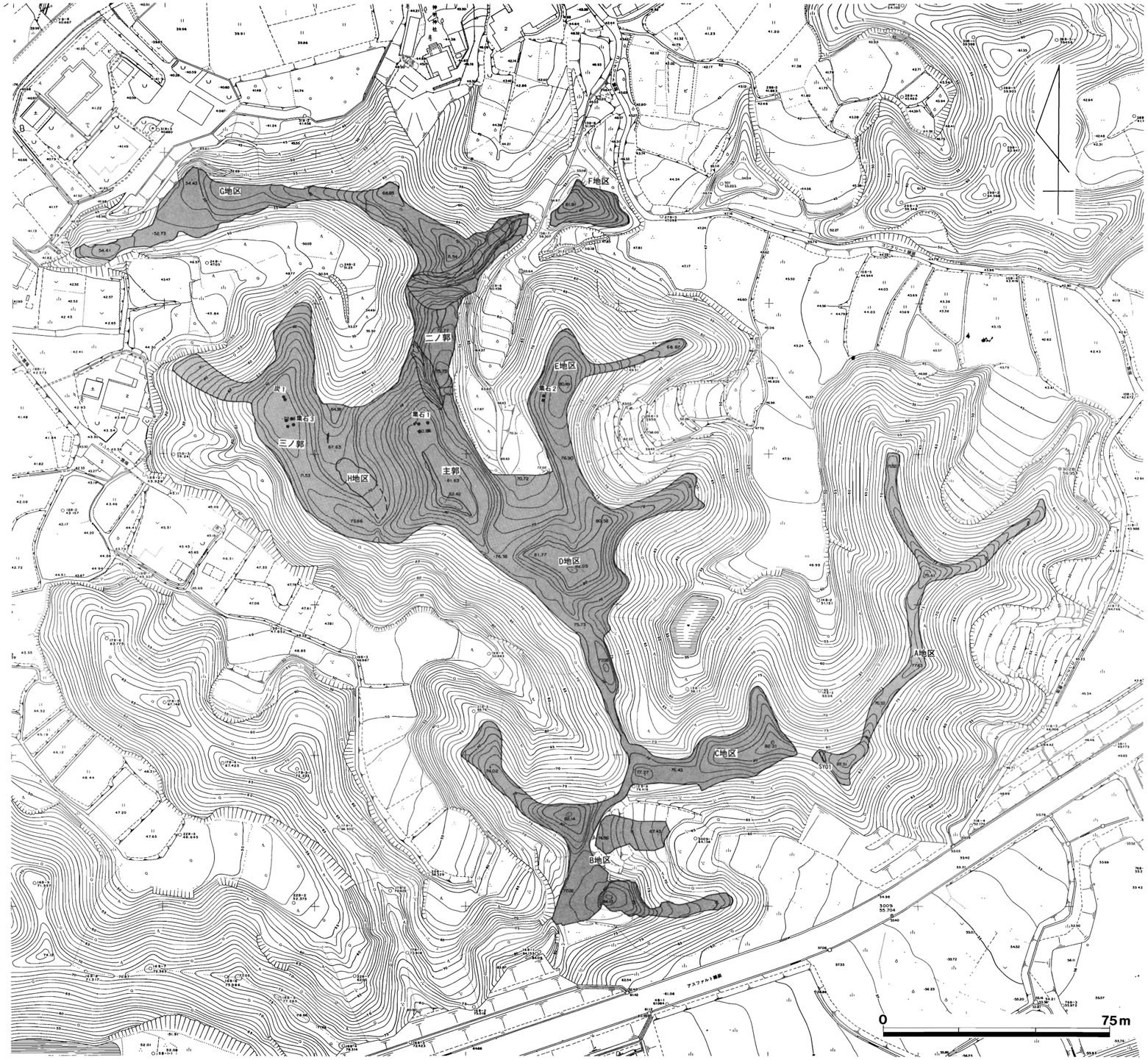
実　測　図　版



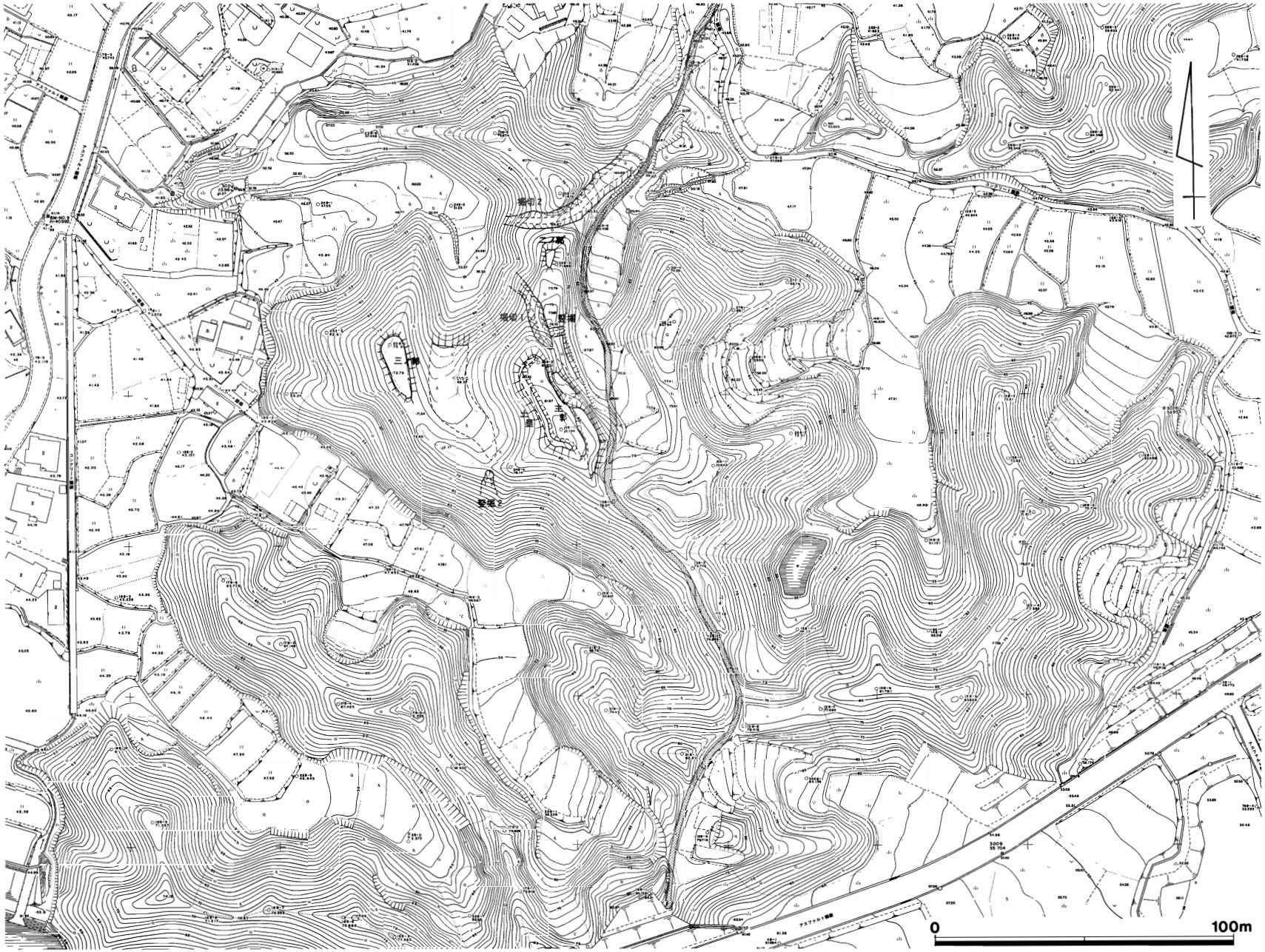
第１図　東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺遺跡分布図



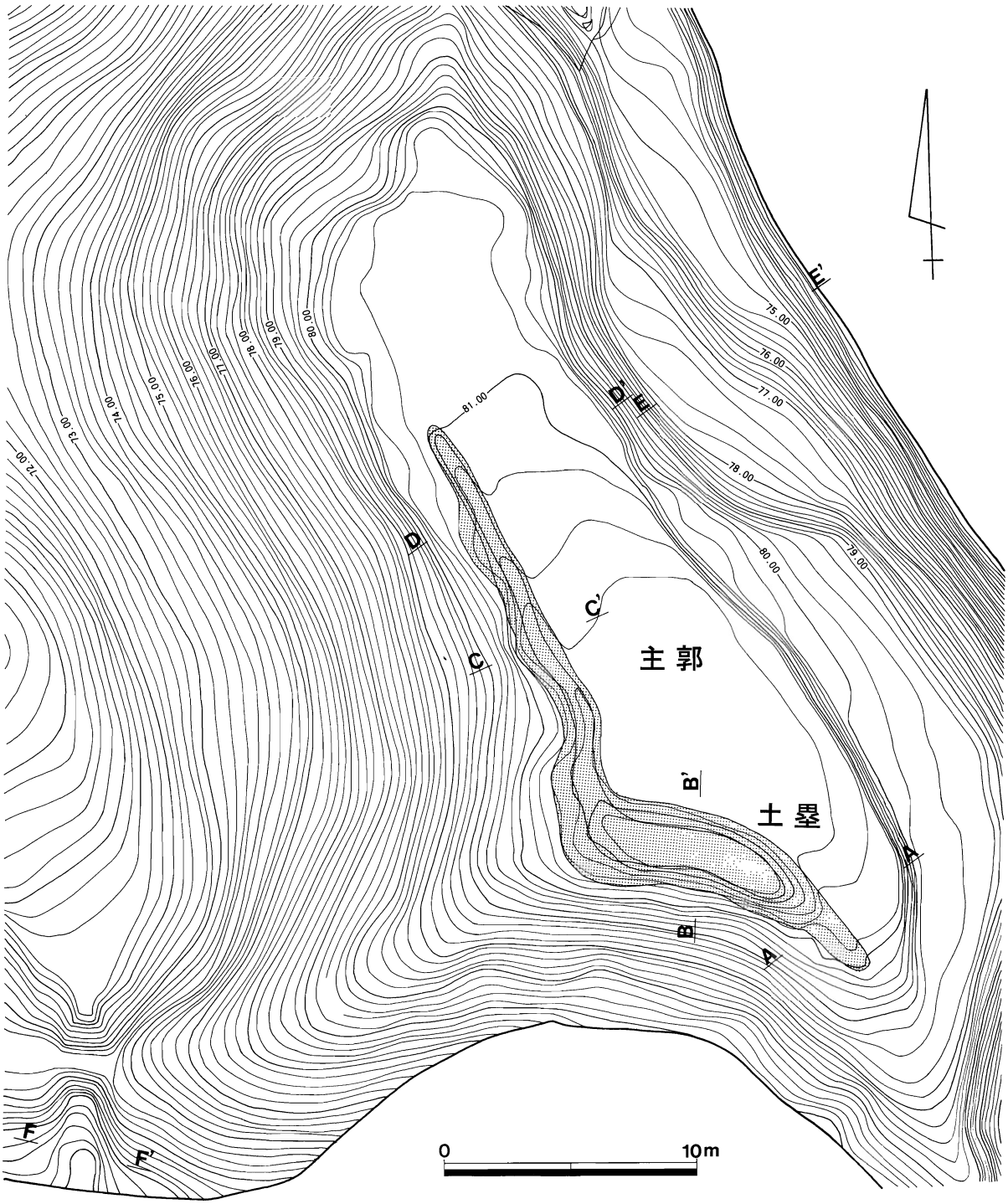
第2図　青名掛川上　2周辺調査地点位置図

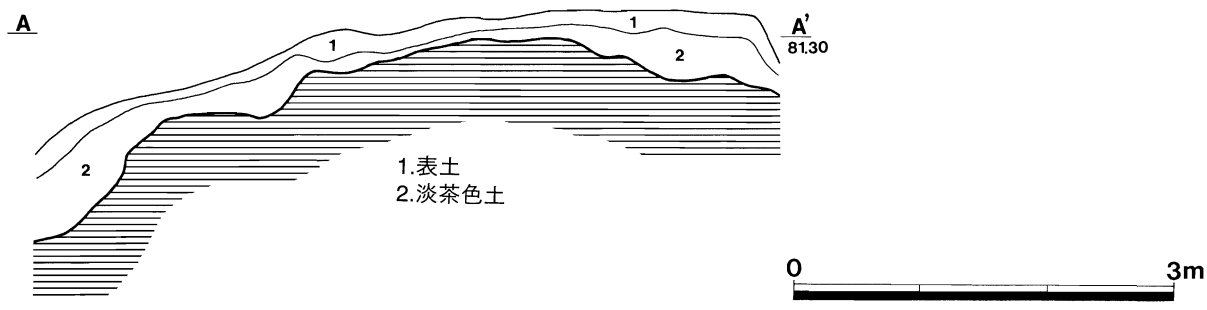


第３図　杉谷城　全体図

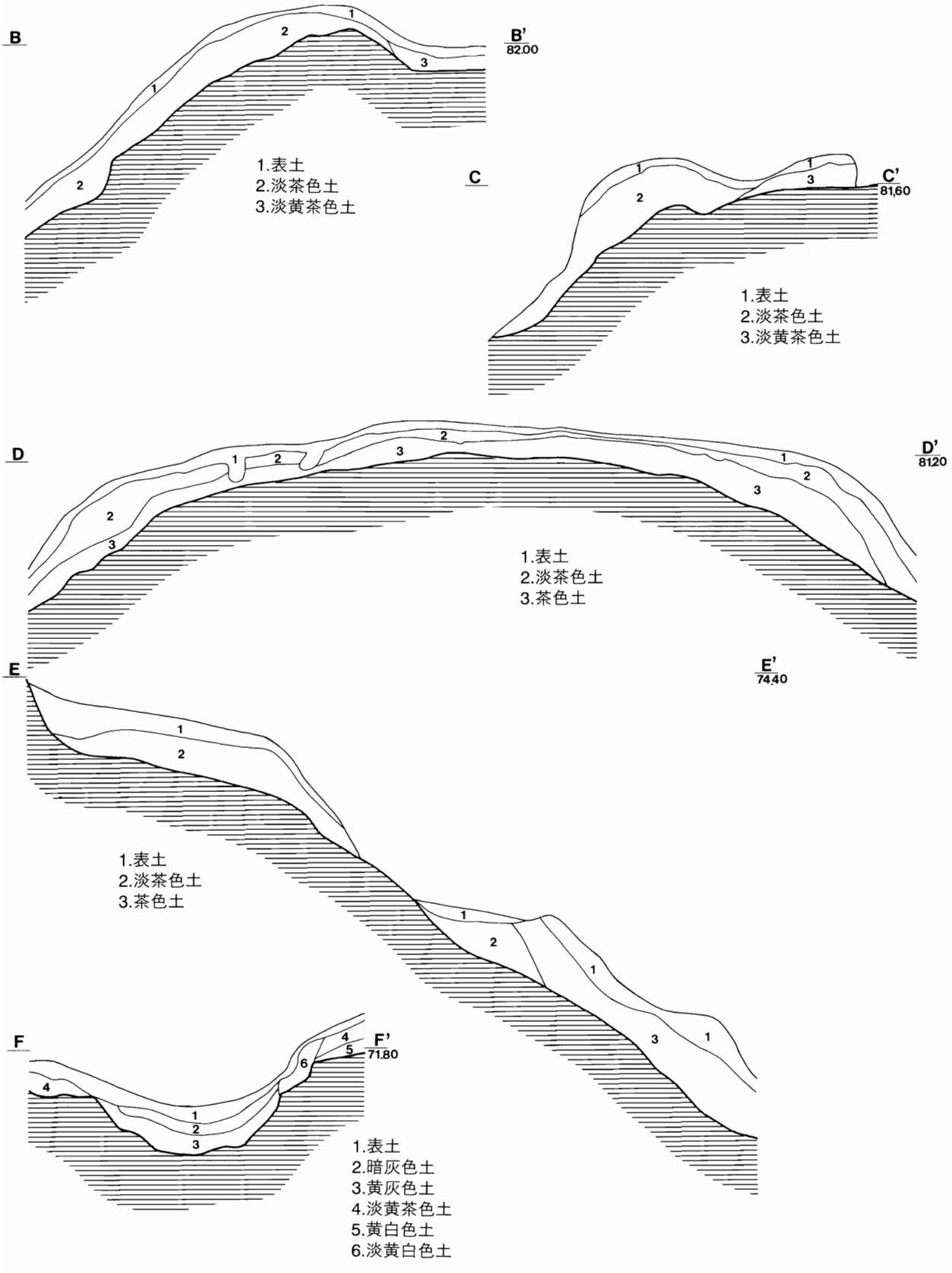


第４図　杉谷城縄張り図

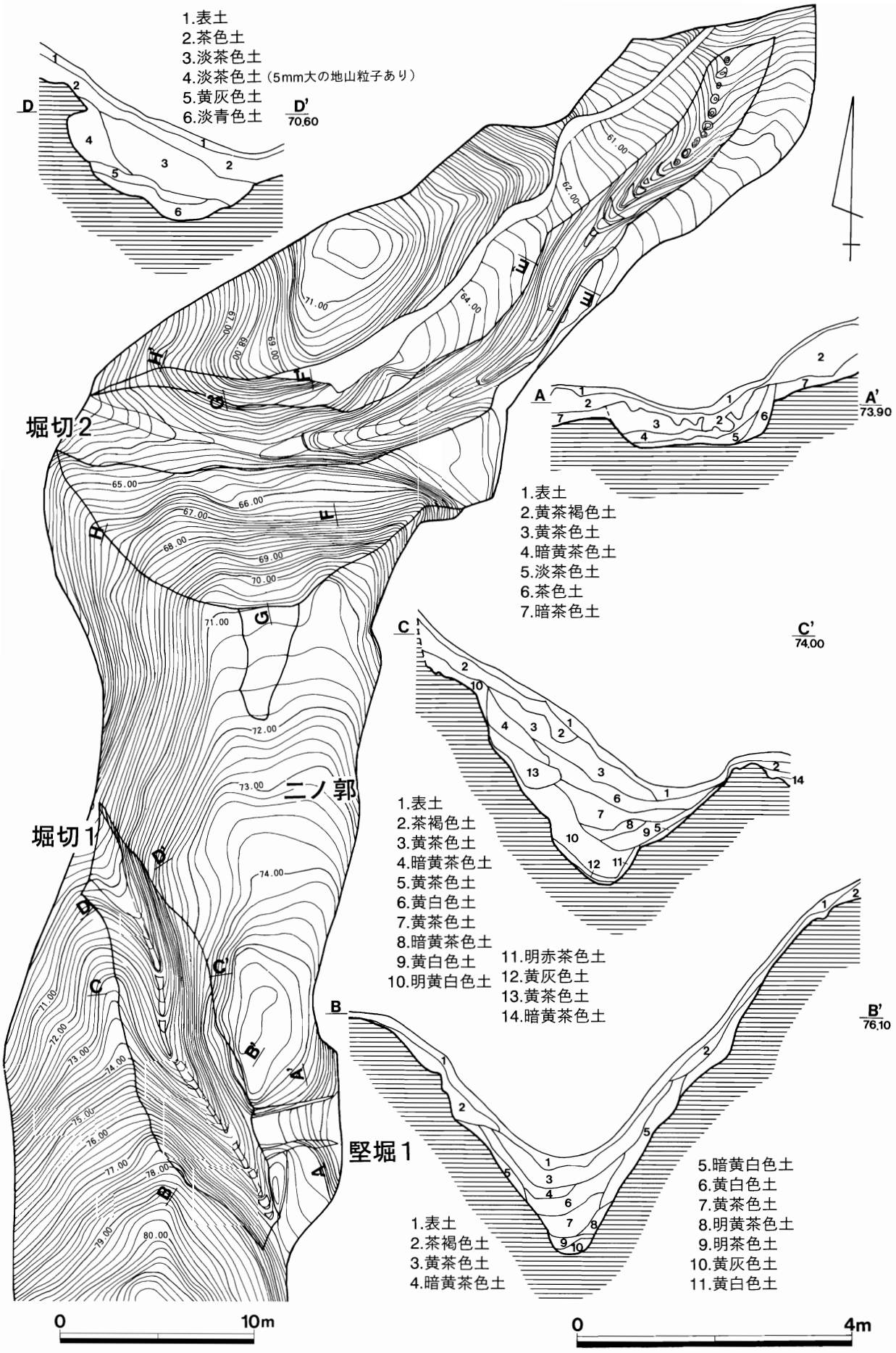

主郭
土塁
堅堀2
81.00
80.00
79.00
78.00
77.00
76.00
75.00
74.00
73.00
72.00
0
10m


A
A'
81.30
1
2
1.表土
2.淡茶色土
0
3m

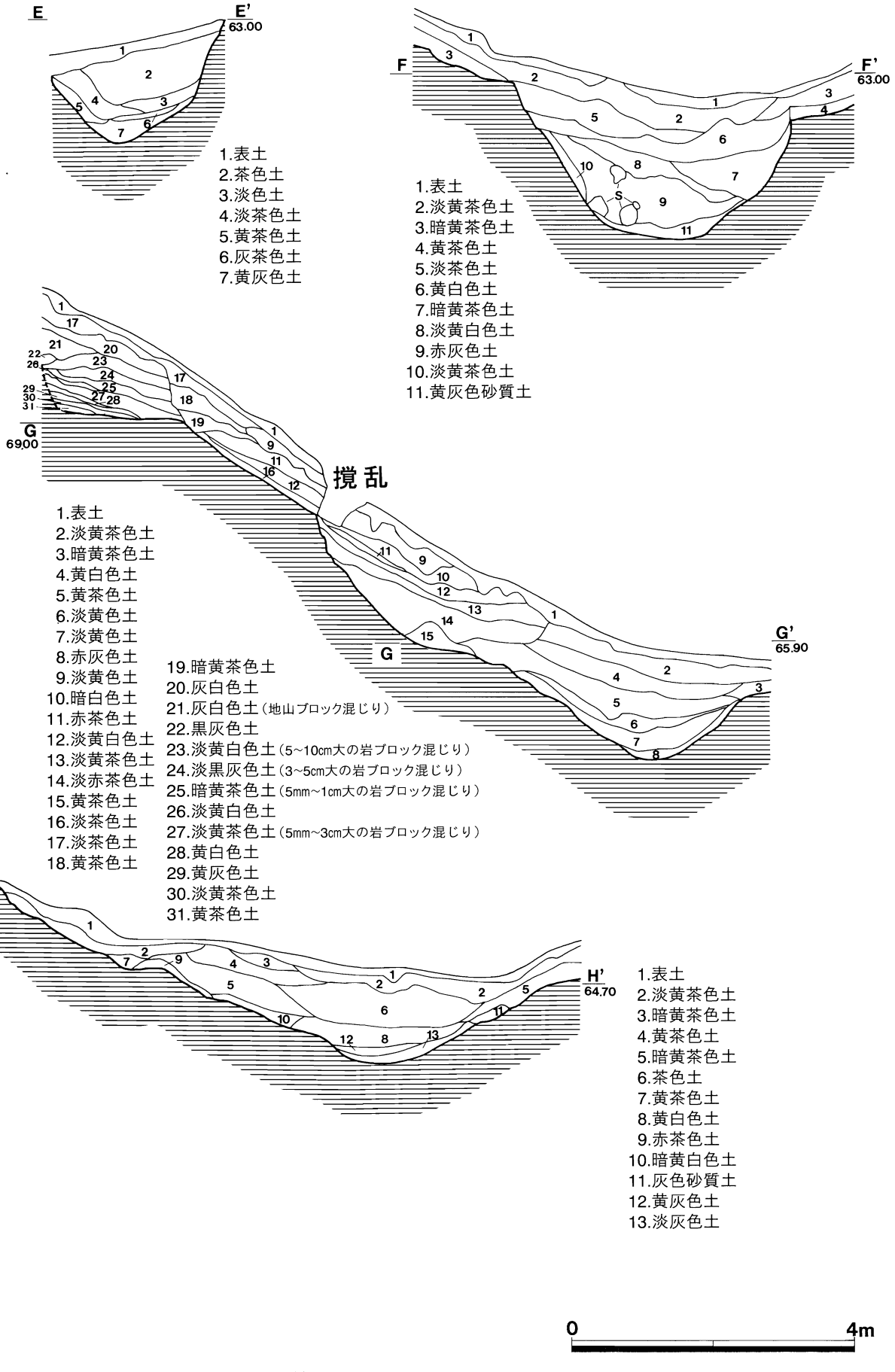
第５図　主郭実測図



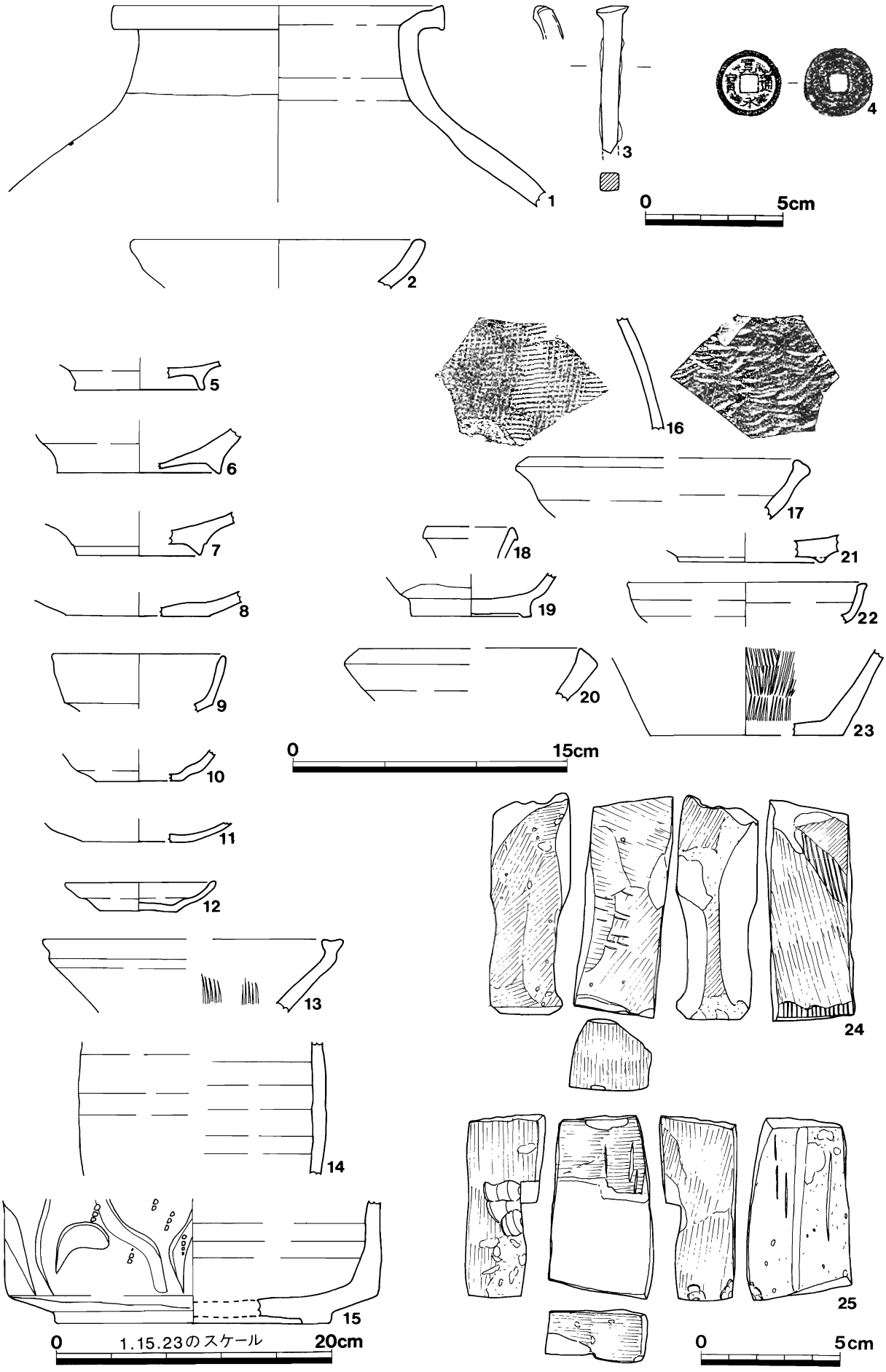
第６図　土塁、堅堀２　土層断面図



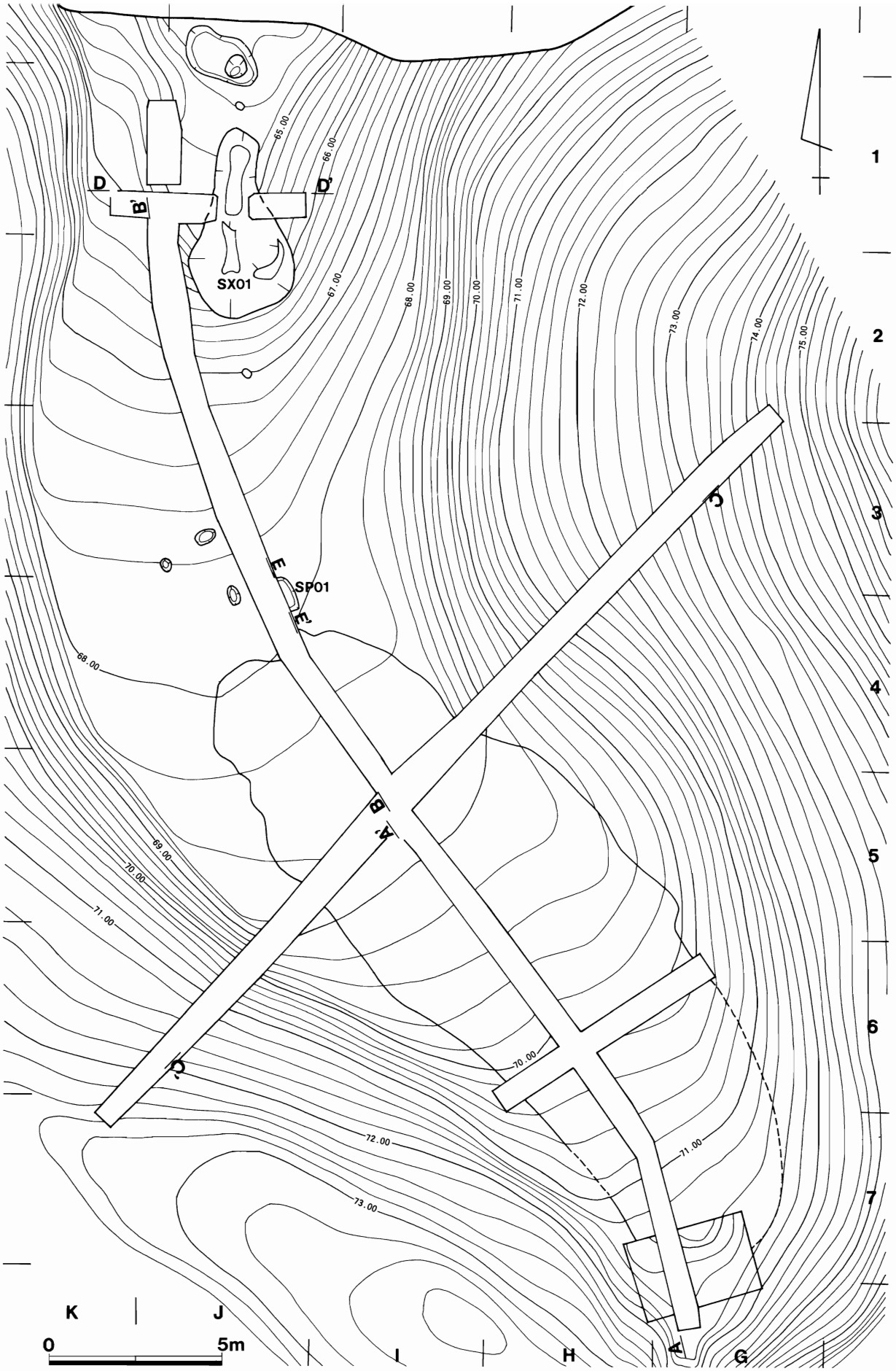
第７図　二ノ郭、竪堀１、堀切１、２　実測図



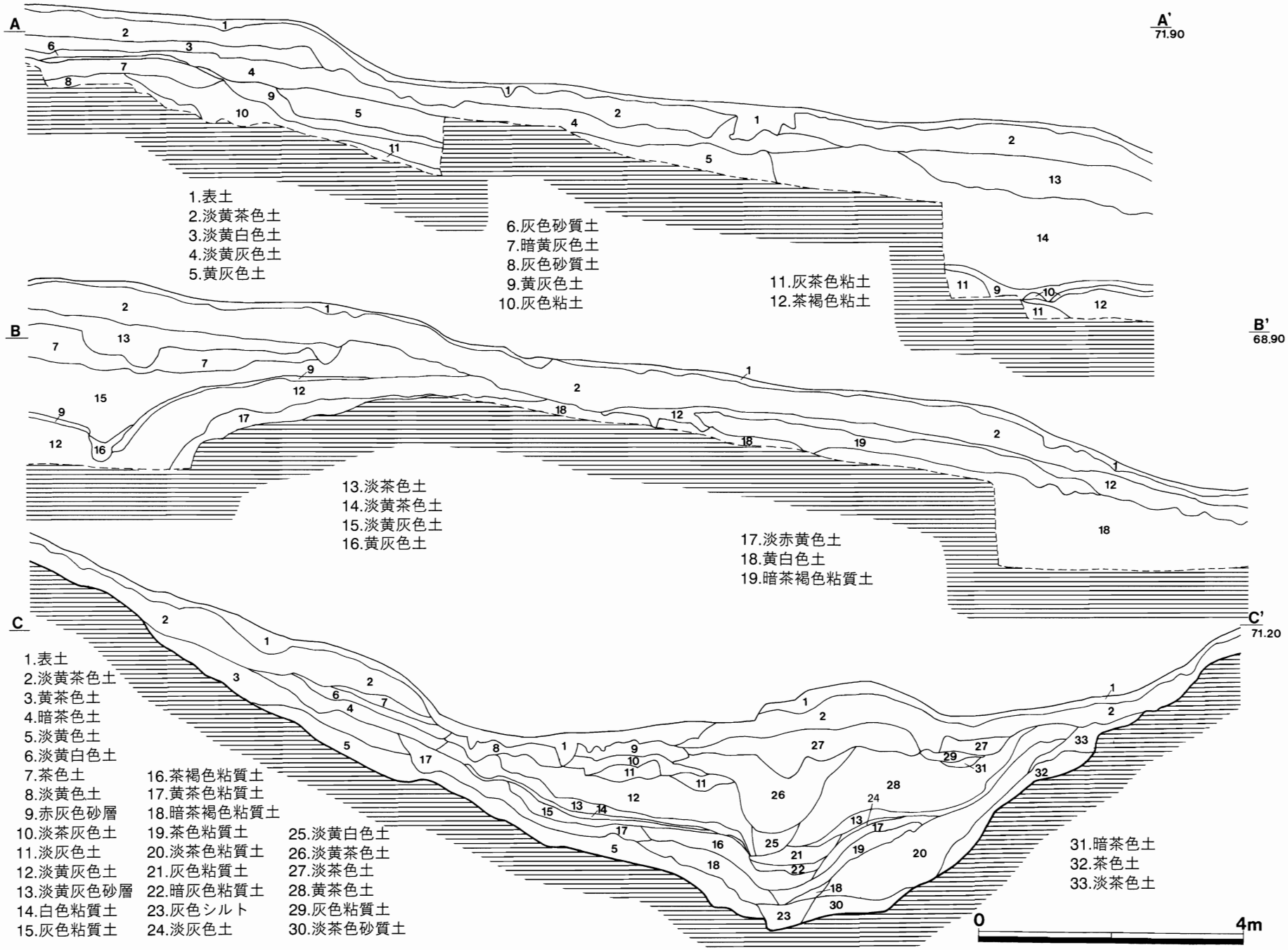
第８図　堀切２土層断面図


1
2
3
4
0
5cm
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
15cm
24
25
0
1.15.23のスケール
20cm
0
5cm

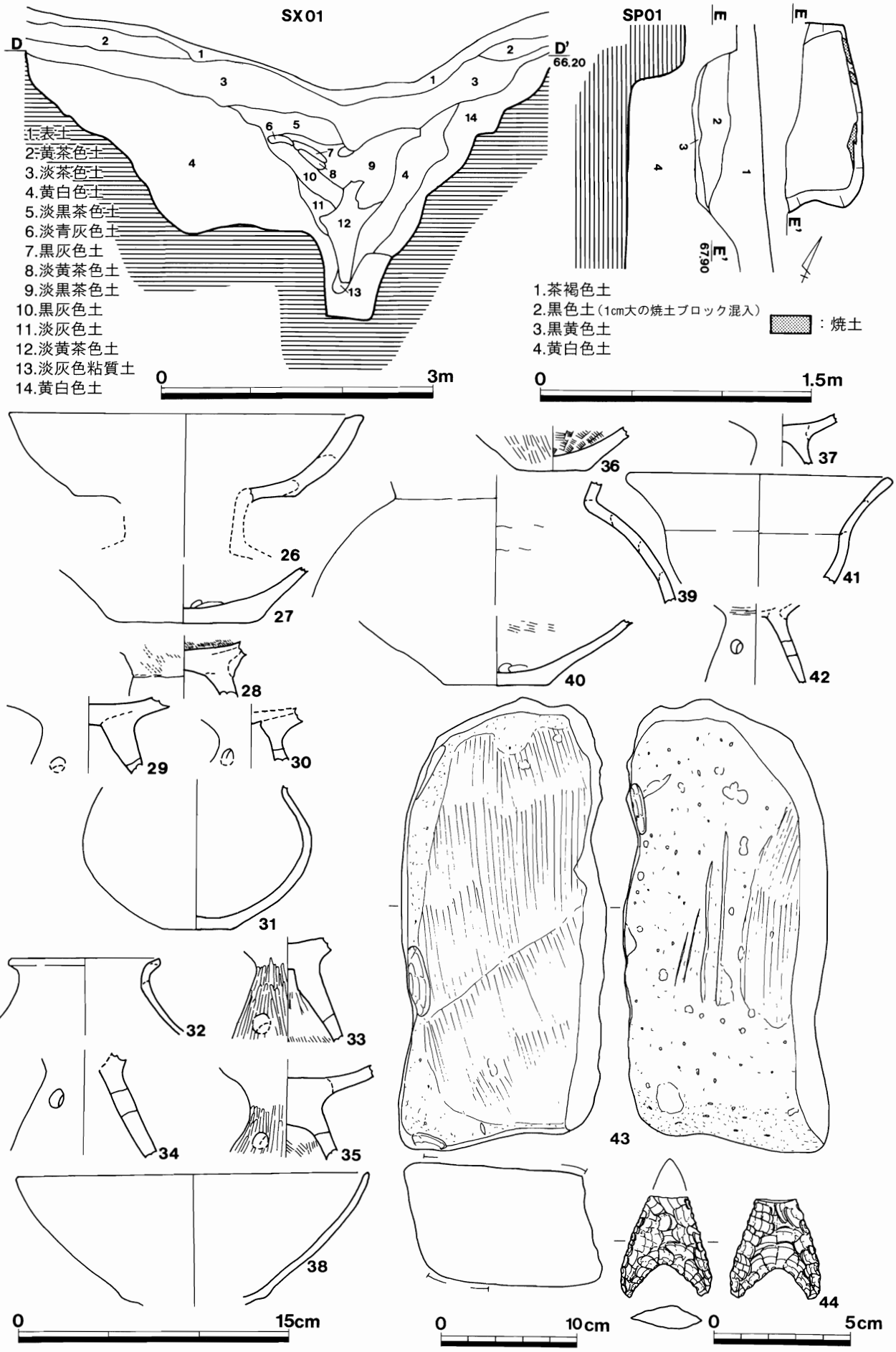
第９図　出土遺物実測図


SX01
SP01
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
1
2
3
4
5
6
7
G
H
I
J
K
0
5m
65.00
66.00
67.00
68.00
69.00
70.00
71.00
72.00
73.00
74.00
75.00

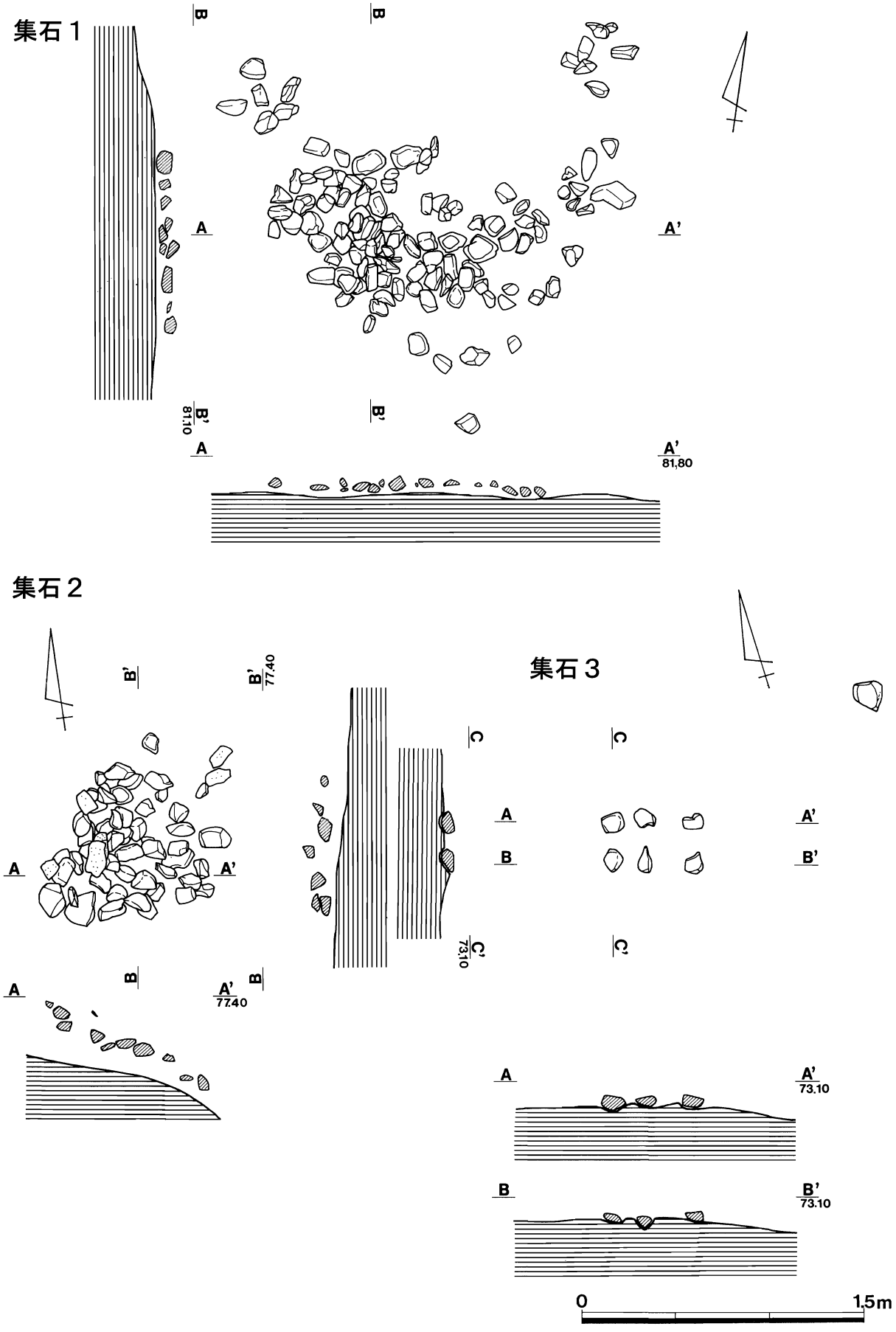
第10図　H地区　実測図



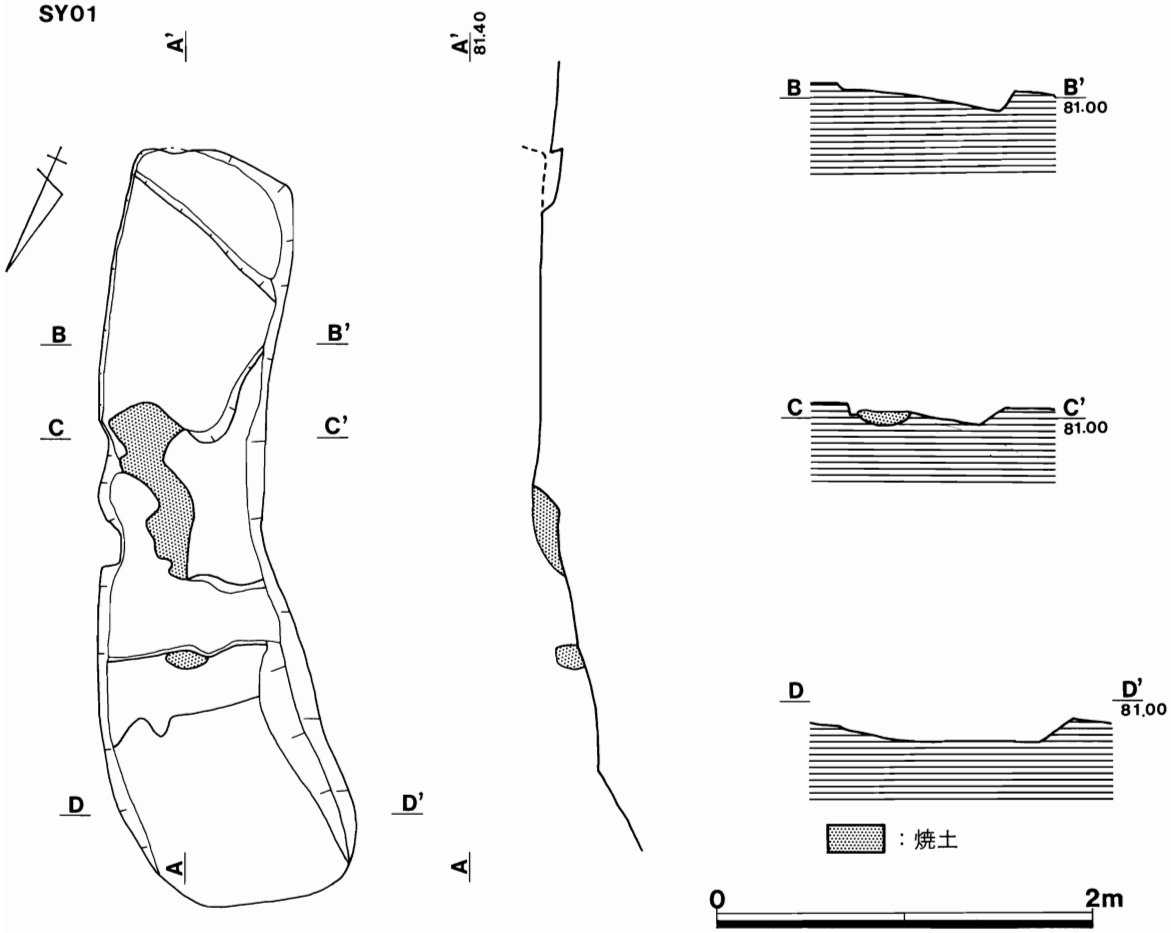
第11図　H地区　土層断面図



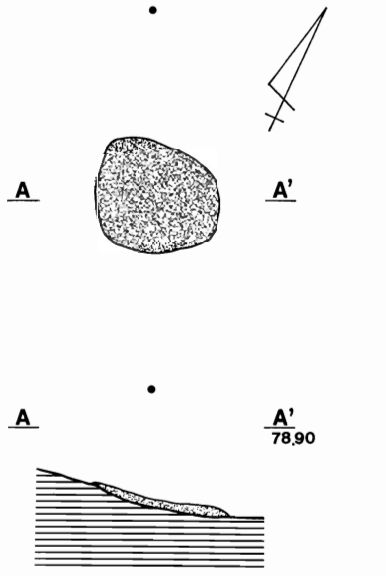
第12図　Ｓ×01土層断面図、ＳＰ01実測図、Ｈ地区出土遺物実測図



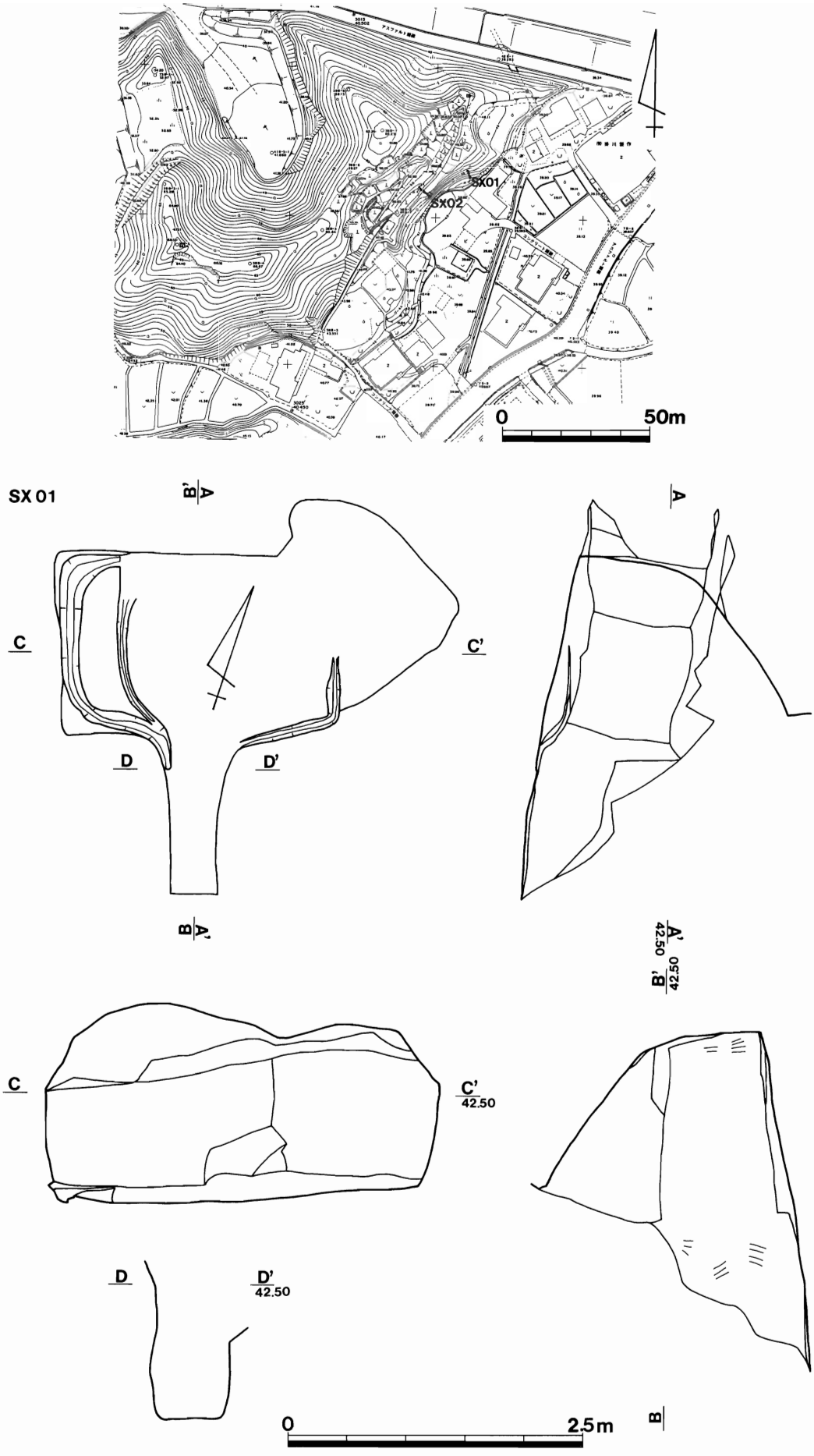
第13図　集石１、２、３　実測図



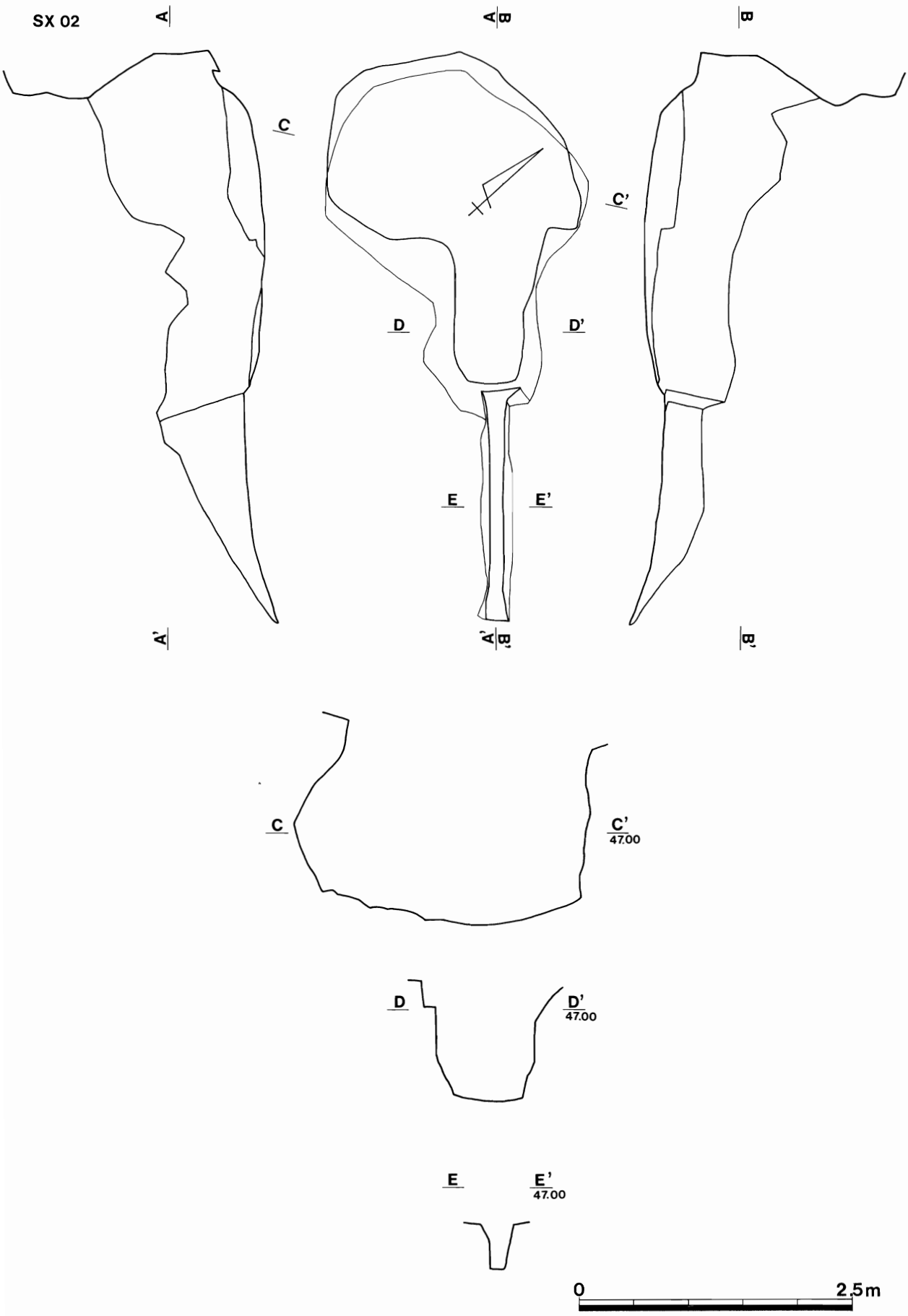
炭１



第14図　ＳＹ01、炭１　実測図



第15図　茶屋辻遺跡　ＳＸ01実測図



第16図　茶屋辻遺跡　S×02実測図

写　真　図　版

図版１

杉谷城遠景（南東から）

堀切１、２完掘（北西から）

図版２

主郭・堀切１調査前（東から）

主郭・堀切１・二ノ郭調査前（東から）

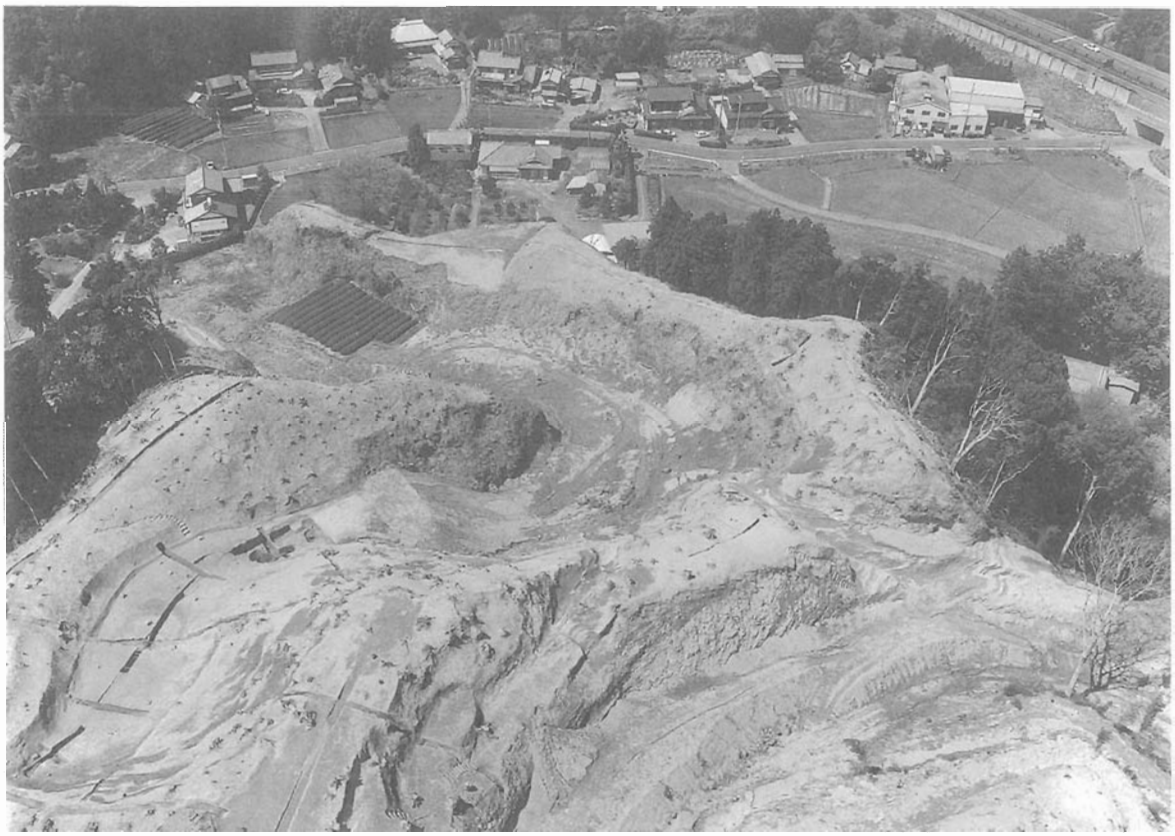
図版３

二ノ郭・堀切２調査前（東から）

確認調査終了後全景（東から）

図版 4

完掘全景（垂直）



完掘全景（南東から）

図版５

主郭・堀切１・二ノ郭完掘（東から）

主郭完掘（南から）

図版６

土塁Ｃ－Ｃ’ 土層断面

土塁Ｂ－Ｂ’ 土層断面

図版７

堀切１・二ノ郭全景（南から）

堀切１Ｂ－Ｂ’土層断面

図版８

主郭・堀切１全景（北から）

堀切１近景（南から）

図版 9

堀切２全景（西から）

堀切２近景（南から）

図版10

堀切２近景（北から）

堀切２Ｅ－Ｅ’土層断面

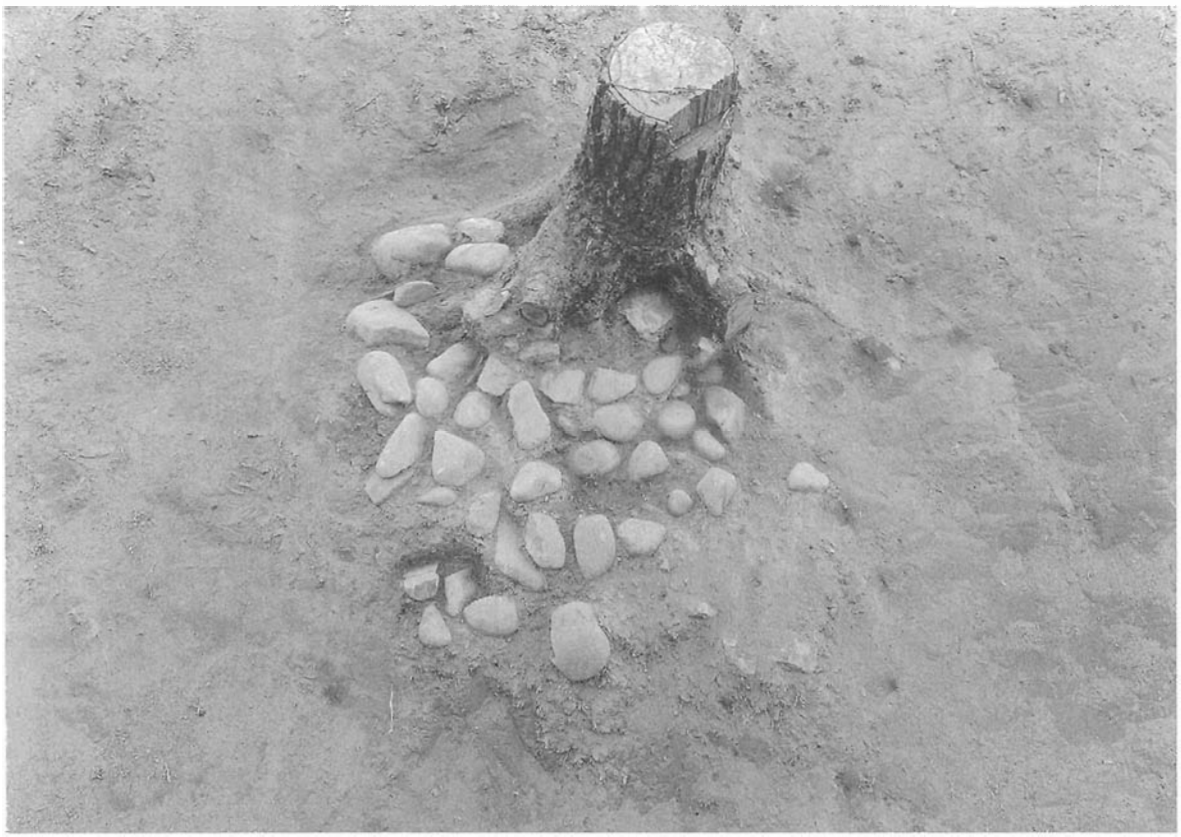
図版11

二ノ郭全景（北から）

竪堀２土層断面

図版12

集石１（北から）



集石２（東から）

図版13

集石３（北から）

炭１（南から）

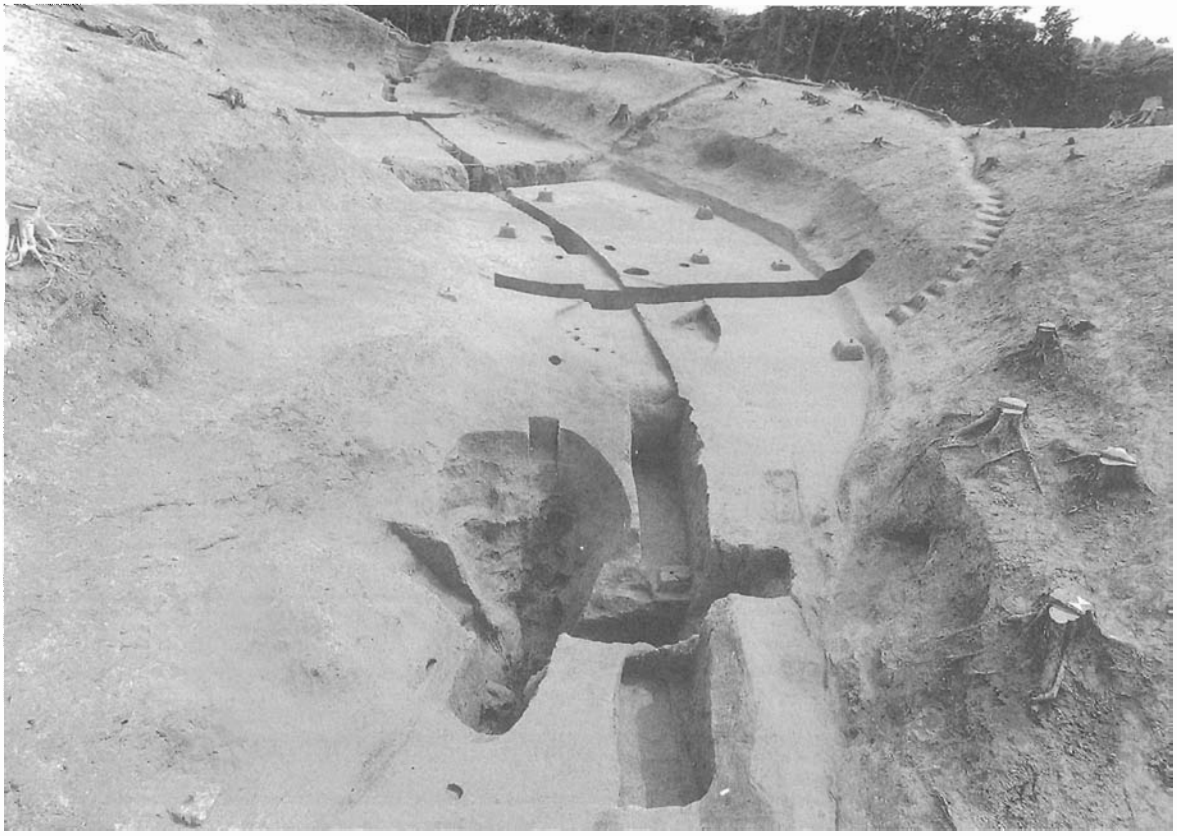
図版14

主郭作業風景

堀切２　作業風景

Ｈ地区　作業風景

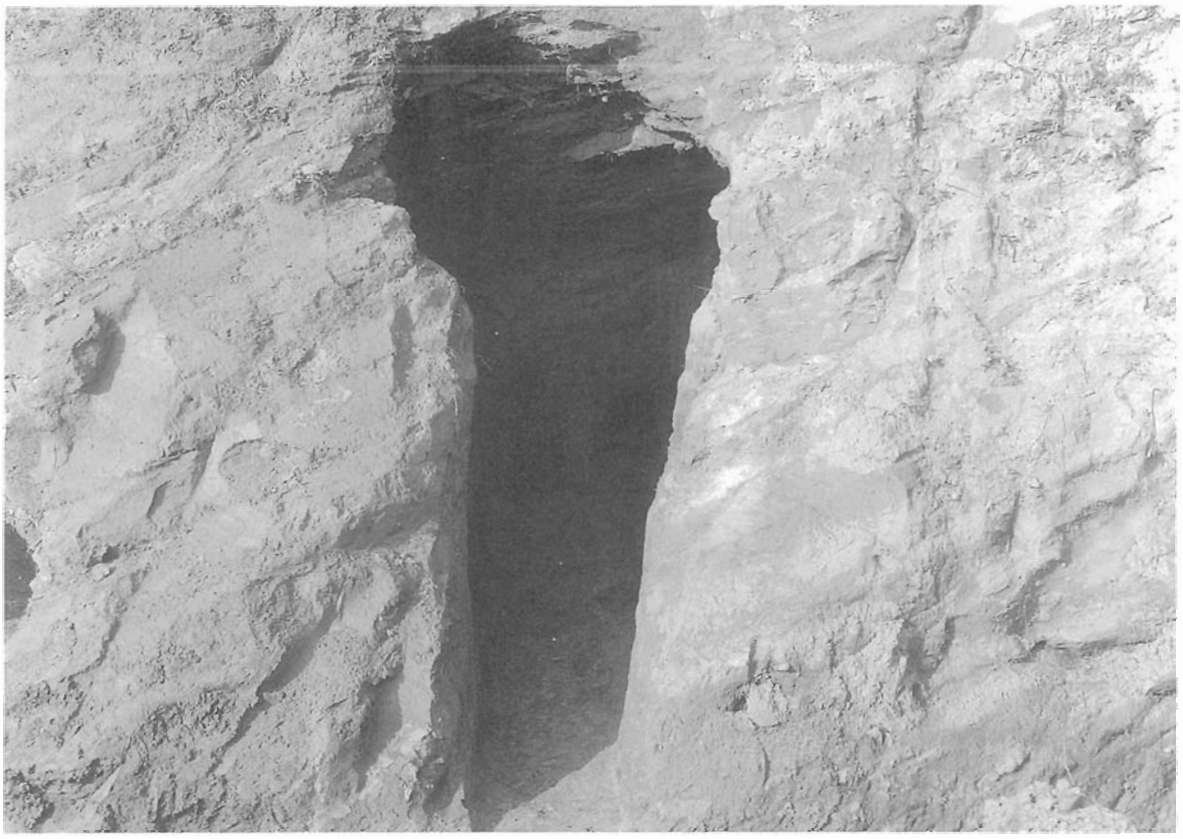
図版15



Ｈ地区 全景（北から）

ＳＰ01（西から）

図版16



茶屋辻遺跡　S×01　全景

S×01　内部

図版17

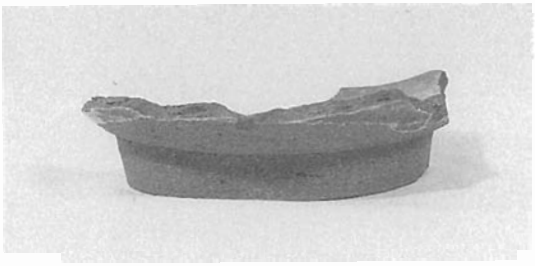
S×02 全景

S×02 （西から）

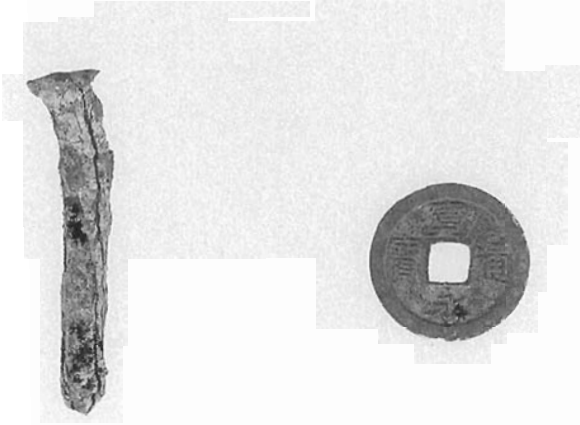
図版18

1

12

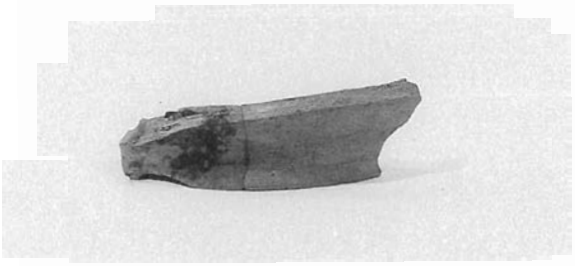


19



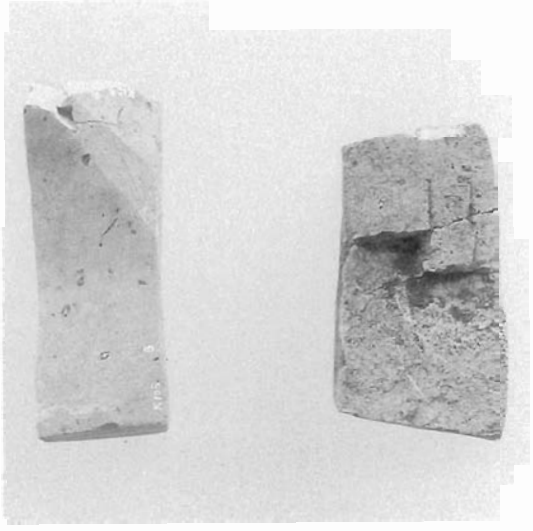
3　4

24　25



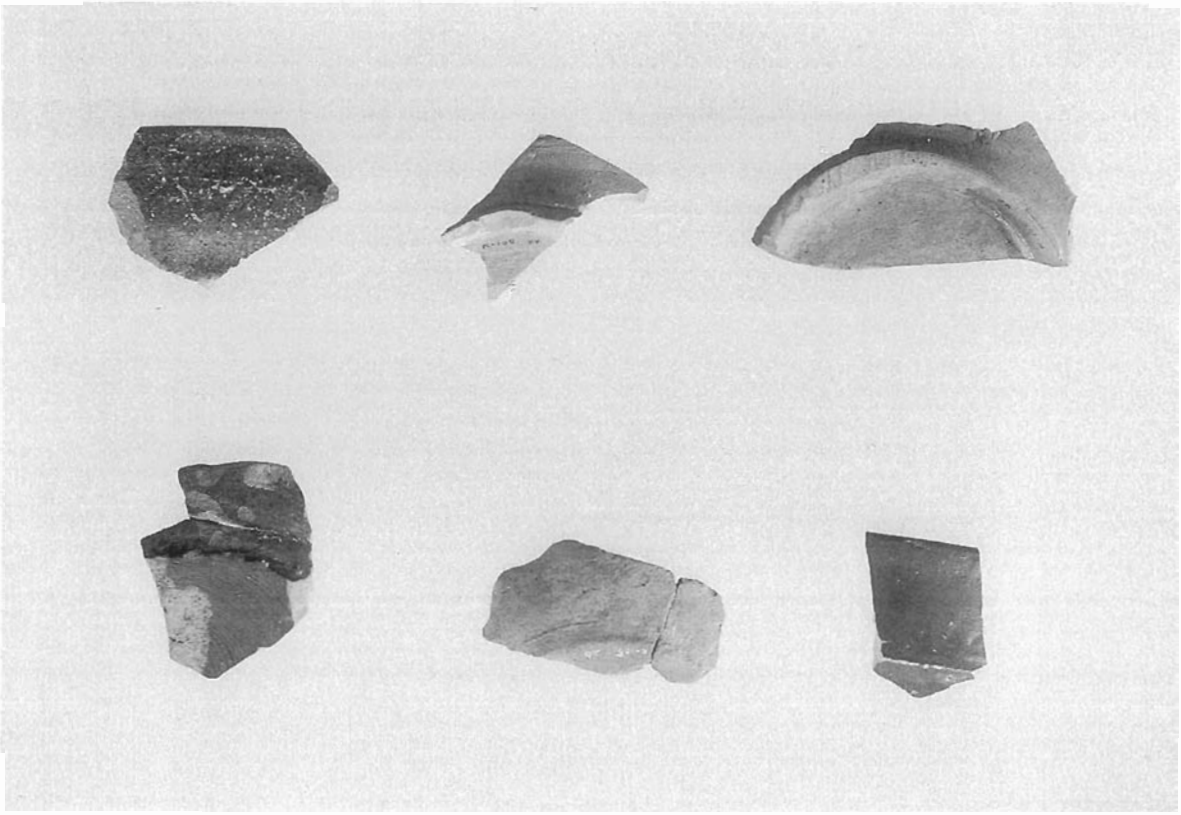
6

15

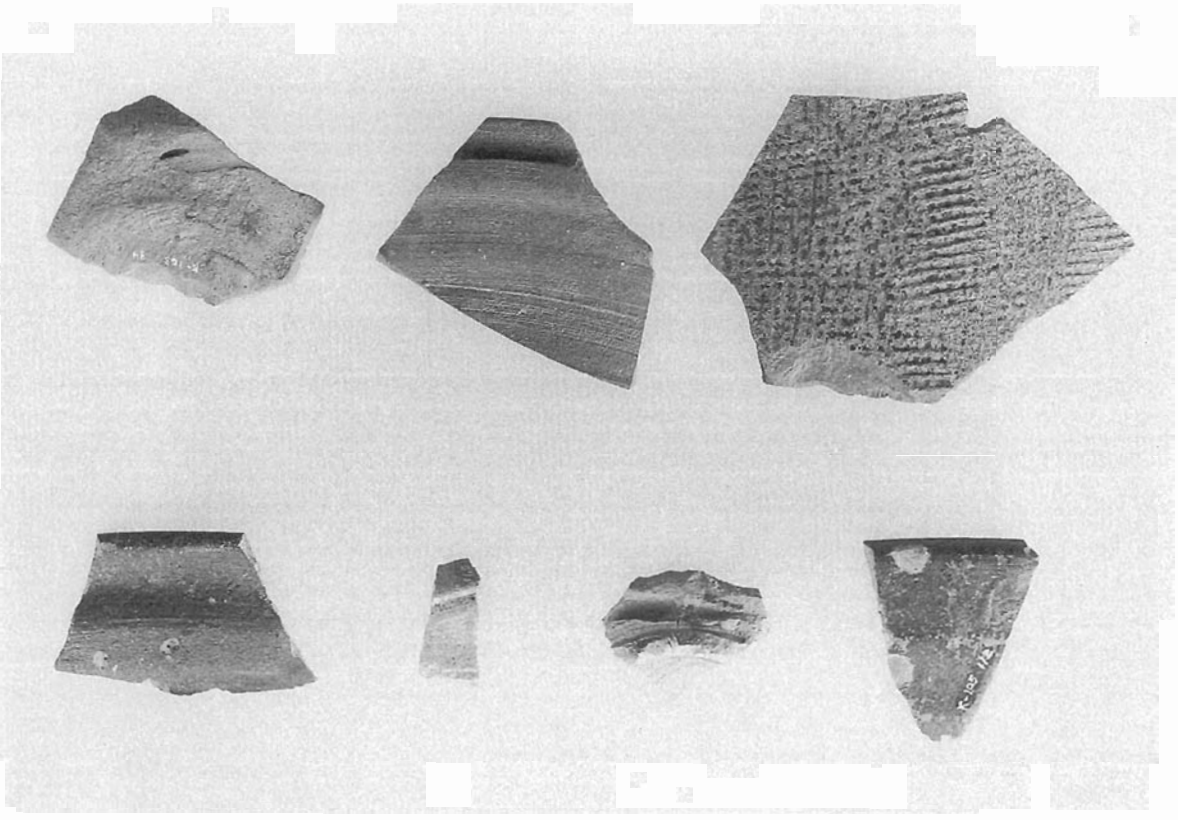


24　25

図版19

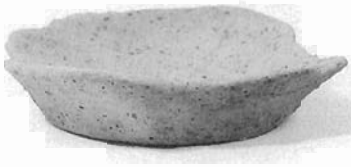


2　7　5
8　10　9

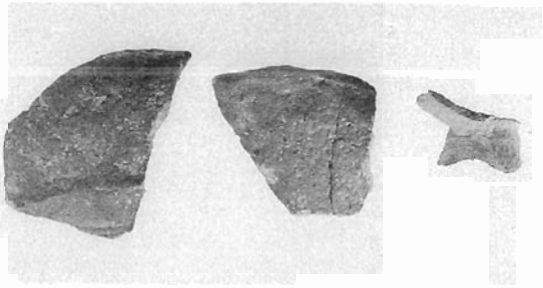


11　13　16
17　18　21　20

図版20

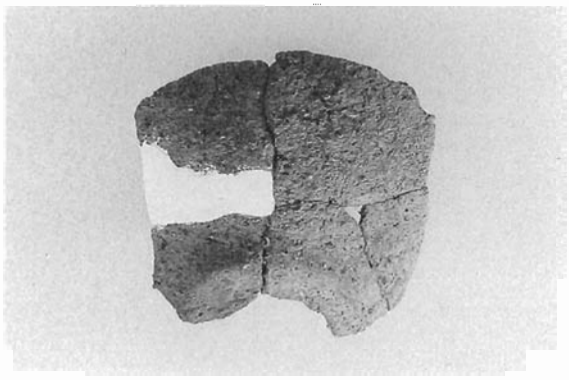


27



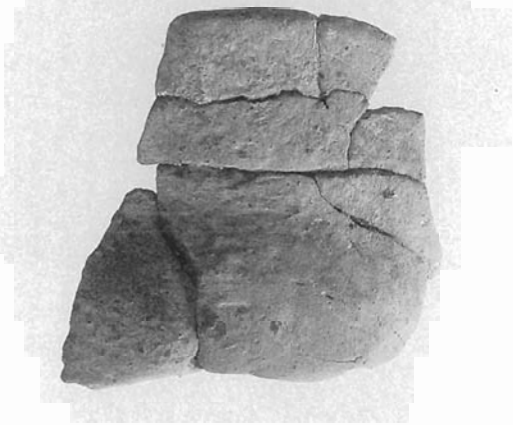
26　37

31

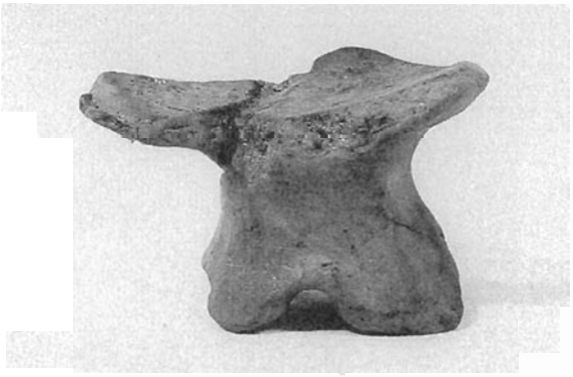


38

33



41



35

43

44

報 告 書 抄 録

ふりがな	とうめいかけがわあいしーしゅうへんとちくかくせいりじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ いち
書　　名	東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　I
編集者名	井村広巳　加藤理文
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436－8650 静岡県掛川市長谷701番地の１　TEL(0537)21－1158
発行年月日	2002年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すぎやじょう 杉谷城	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 すぎや 杉谷552-2外	22213	105	34度 45分 33秒	138度 02分 02秒	19950426 ～ 19960331	57,333㎡	東名掛川Ｉ・Ｃ周辺土地区画整理に伴う発掘調査
ちゃやつじ 茶屋辻	かけがわし 掛川市 すぎや 杉谷671-1外	22213	524	34度 45分 40秒	138度 01分 56秒	19991118 ～ 19991201	300㎡	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉谷城	城館	室町時代	堀切２ 土塁１	かわらけ	永禄年間の掛川城攻めの際に築かれた砦の一つである。
		古墳時代	土坑１	土師器	
茶屋辻	その他	古墳時代？	横穴？１	なし	

東名掛川Ⅰ・C周辺土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ

2002年３月

編集発行　掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701番地の１
TEL 0537-21-1158

印　　刷　有限会社　幸栄印刷
静岡県掛川市弥生町35
TEL 0537-24-4341(代)